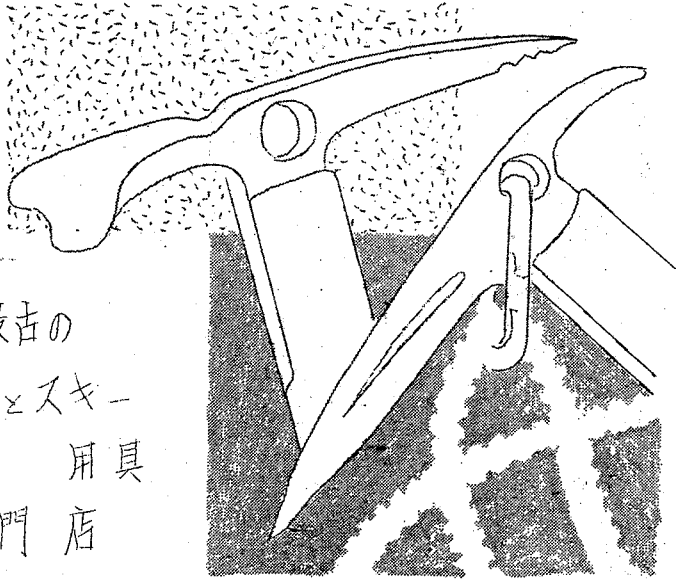

時報

No. 10

1959. 8

大阪大学山岳会



日本最古の
登山とスキー
用具
専門店

大正13年創業

大阪・東京・神戸・福岡

好日山莊

シモン シムルレ ピックル 日本代理店
ハット スキー 輸入元
札幌 竹田作 ピックル・アゼン 関西總代理店

大阪市北区老松町3-12

TEL(34)7745

時報 第10号 目次

遠 征 雑 感	篠田 暉治 (2)
1958年度 春山合宿報告 黒部川上、廊下積雪期初横断	(4)
1958年度 冬山合宿報告 洞沢折西尾根より北穂高岳、奥穂高岳	(32)
平湯新人スキー合宿	(43)
1958年度 夏山惣合宿報告	(44)
ヒマルチユリダヨリ	住吉仙也 (46)
1958年度 一般山行報告	(50)
岩登りトレーニング報告	(73)
雑 纂	(74)
会 員 名 簿	(78)

※1958年4月より1959年3月までの記録※

遠征雑感

篠田軍治

戦前海外遠征といふことは我國登山会を賑わした。これは積雪期の山内地では大体消んでしまつたこと、社会主義勢力の遠征に好都合であつたことなどはおもな原因であつたように思われる。

戦後、再び海外遠征が盛んになつて来たが、戦前と違つて南米、南阿と言つたような戦前には簡単に行けなかつたような遠い町まで足をのばすようになり、また戦前のヒマラヤの夢も今は現実になつて来た。戦前と戦後の大きな違いはヒマラヤその他の知識がふえたこと、装備が大きな進歩したことよりも航空機の発達による世界が狭くなつたことか一番大きいと言われている。しかし現在ではこれよりもヒマラヤのジマイアントが大部分を登頂されしまつたといふことでは如何うか。

エベレストが登頂されたとき、もう第三の極地は残つていないといふ、何か少し寂しいような気持とこれからのヒマラヤは昔、英國人がアルプスの附帯時代に再夏海を渡つて出掛けて行つたような形になるのではなからうか、言いかえればヒマラヤもいよいよポーツアルピニズムの時代に入るのではなからうかといふ気なれし心楽しいものがあった。

一昨年アメリカ人の登山家と会つて色々話し合つた印象から言へば、一体にアメリカ人はヒマラヤにはあまり関心がない。

い・アラスカヤ、ブリチッシェ・コロロンビヤ(カナダ)あたりへはよく行くようであり、アラスカはハリコプターを使つて食糧などを落とすか、車のハリコプターをチャーターするのなほかほ高くつくことばししているののアラスカよりもヒマラヤの方が安上りなはないかといふと、やはりアラスカの方が安いと言つてあまりヒマラヤへの関心を示す者なはなかに、自分の会つた靴紐といふの制限られた人数であるからこれをもつてアメリカ人の一般の傾向とは言ふなほかほ知れぬいが、少くともヒマラヤはスポーツアルピニズムの対象になり難いといふよゝな考え方があるのではなはかといふ印象を受けた。

今のアメリカ人は往年の英國人と似たところがある。夏休みになるや大勢な海を渡つてヨーロッパへ出掛けるところは、昔の英國人などドーバーを越えて大陸へ出掛けたのと同じだと言つて羨まへない、だから彼等にとつて海外の山へ出掛けるのは簡単なる旅行でしかぬい、ちよつと明治末期に日本アルプスへ出掛けるといふと篠井線の明科を汽車を降り、大町に出で一泊、翌日濁と小大天を一泊といふのは時間的に言つて、今では随つた大陸へ行つて山登りのベースまで行くのと時間的にあまり違ひはない、その上、昔の日本アルプスのように一人を数人の人夫を連れ行くのとは、全くのメマラバである。日本でも昔の日本アルプスはこんな形であつたこと、しかも先人はこれを毎夏繰り返して来たことを思つと、今のアメリカ人が、毎夏または毎クリスマスス木曜毎に海外の山へ出掛けて行くことも不思議はない。

夏はアラスカあたりへ、冬はアンデス又時によるとアメリカへ、日本からばかりかどのエクスパティションであるか、アメリカ人は資金力に乏しむるわけなはなし、裝備も会社の寄附を求めたものでもなし、あり合はせの裝備で出掛けて行く、こつちうのなほポーツアルピニズムの眞の姿ではなからうか、しかしこれも一庄に一度といふやうなものでは面白くない、こんな種類の山登りは今のヒマラヤのなほまだ一々無理なやう、しかし、だんだんとこんな形になつて行くべきものかと考へてよいのではなからうか。

一九五八年度 春山合宿

黒部川上ノ廊下積雪期初横断

1959年3月の記録

1. まえがき
2. 行動概要
3. アタック隊報告
4. 食料報告
5. アタック食糧
6. 装備報告

1. まえがき

戦後大高山岳が再建され、当時すでに篠田先生、その他一部の人々が上廊下に目をつけていたのであるが、当時は主に後立山周辺に多く積雪期合宿が行われ、まだ後線の行動に確信が持てなかつたのでこの問題は長い向取上げられずにいた。

しかし積雪期の目標が後立山連峰に於いて後線を行動しようとする段階に入ってくるに依り、黒部川の横断に手を付け、数多くの準備と失敗が積重ねられ、遂に31年春、西川、岡田の三氏によって初めて鳴沢内縁之期平、立山と横断に成功し、これから次第に上廊下のちに焦点が移って来た。そして31年冬期、

木村裕リーダー他十数名が浦田温泉―大野町沢―双六小屋―雲の平のコースをとって兼師岳アタックの計画を実行したが、運悪く延べ2週間以上にわたる吹雪のため失敗した。

さらに2年して、33年冬期、岡田博司リーダー他7名が三沢小屋横にテントを出し、赤牛岳にアタックを試みた結果、名のアタック隊は14時間のアルパイトで無事成功し、黒部上廊下横断計画が次の目標として再び形をなしたのである。

しかし、これを実際に行う段に多くの数多くの解決せねばならぬ問題に直面せざるを得なかつた。即ち

一、黒部川上廊下は谷が非常に深く、その兩岸は非常に急傾斜であり、縦断はこの進行は困難である。

二、積雪期の黒部に關するおぼろげ、大正15年の西堀内等の記録をいしかねい。

三、陸奥地帯は不正確をさわめ、誤り亦非常に多い。

四、高度200m以下では猛烈なフッシュエである。

五、アプローチ本長いのでテントを最低半張必要であり、テントを新しく張作らねばならぬこと。

六、春は積氷するのでスノーブリッジがかかることがあるか不明である。

七、赤次東越附近及び黒岳周辺の難場をホッパ隊が事故を絶えずに通れるか否か。

八、最後に優秀なメンバークが20名以上必要である。

等である。第一、二、三の肉體を解くために、33年夏から延4パーティが赤牛岳の周辺に入つて結果、11月に野田、米林、山本、田村、佐藤のパーティが赤牛岳頂上より尾根を下つて上郎

下のスゴ沢、谷合に下り、ここ50米の徒歩をして対岸に渡りスゴ沢をつめてスゴ小屋にたどりついた。その結果、フッシュエは非常

常に密であるが積雪期にはこれに完全に雪の下になるかも知れない事々、スノーブリッジが期待出来ぬ事、又スゴ沢には大

きな氷がこつあるけれども春には雪崩のせめにくまっています

かも知れぬ。等の事わかり、このルートが唯一の可能なルートである事が、はっきりしたのである。

第多番目のテントの向題は30年12月に解決されたので、向題は如何にして内滑に赤牛岳まで荷物をホッパ隊するかという事と新人に被褥を荷物を担がせて良いかという向題が解決された。しかしこれはやむを得ない事であった。

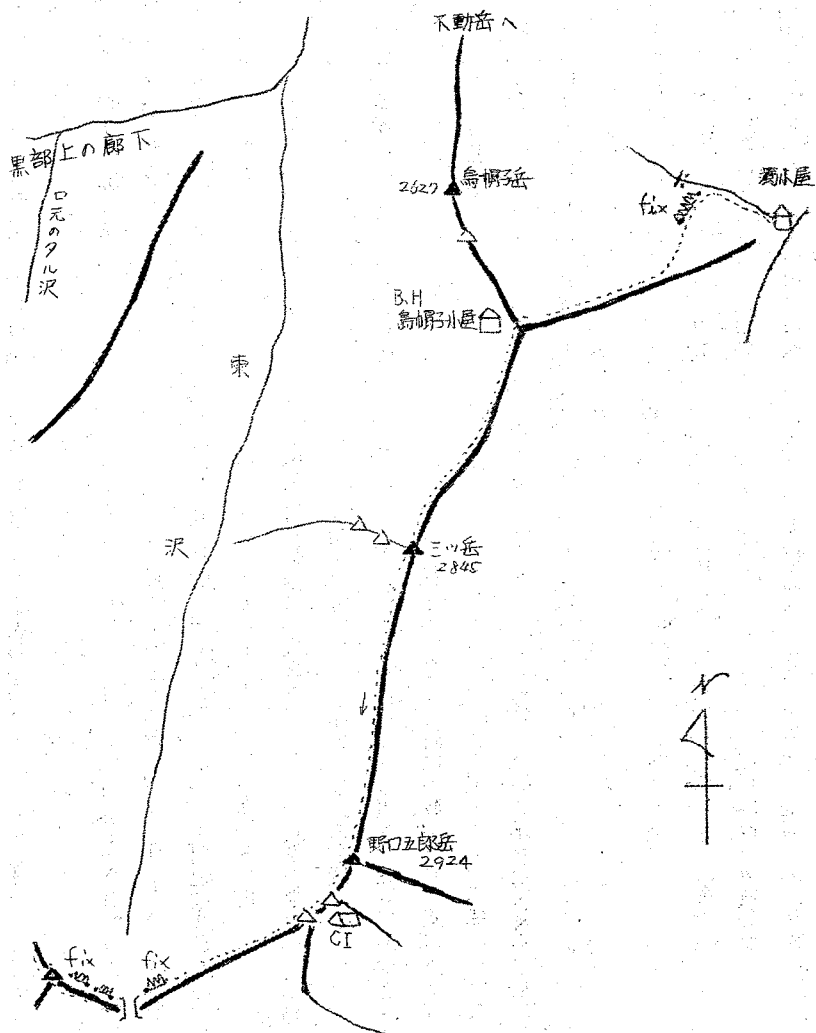
實際の行動計画は別表を覚えてもわかると思ふが、BHを黒帽子山、CIを野口五郎岳、CIIを赤岳と黒岳の中間、CIIIを赤牛岳、CIVを赤牛岳北西尾根上200mのピークに出す、そして計画を3つの段階に分け、第1の段階ではBHに荷物と人糞を集結する事、

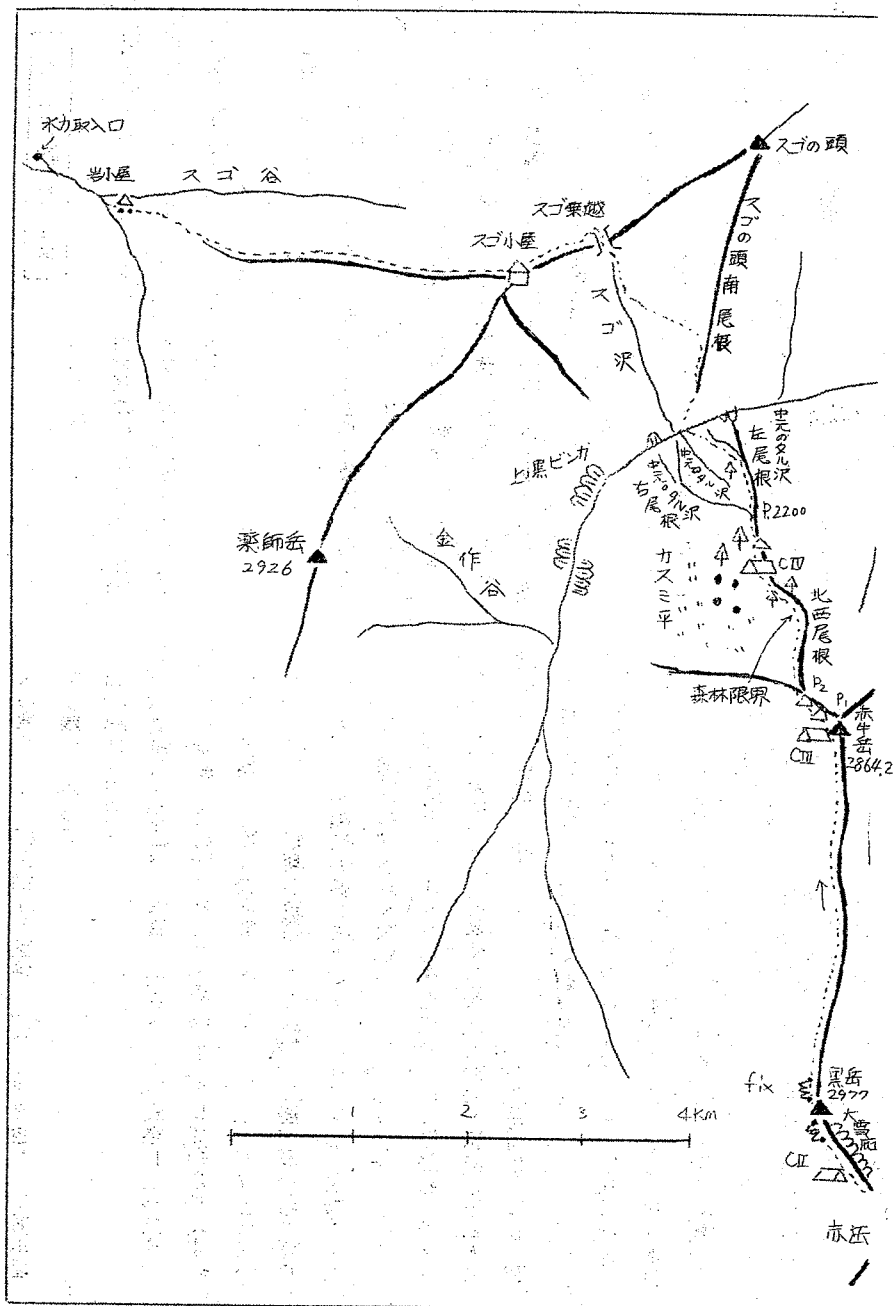
第2段でCIIを建設しこれにCII、CIVアタック用の必要物資を集結し新人を下山させる。そして最後の段階でCIVまでカムアを走らせてアタックを行う段取りであった。

尚、偵察のための山行は次の通りである。

- I 赤野岳・金作谷 8月17日〜19日 60頁参照
- II 有峰 三稜 赤牛 10月6日〜10月12日 64頁参照
- III 赤牛上 野口 10月8日〜10月11日 64頁参照
- IV 赤牛よりスゴ沢へ 11月3日〜11月7日 71頁参照

概念図





2. 行動概要

合宿用団体装備及び食糧のうち400kgを秋の野上けにより鳥嶋子に入れてあったの(3)番には残り半分の360kgを荷上げせねばならない。個人装備は全員の40kg以下である。

期間 3月10日〜4月2日

メンバー OB広橋(アタック)、3年生 GL山本、兼清、野田(マネーシマー)、米林(アタック)、平田、木村、2年生 大島(装)、田井、大工原、五井、笠松、田村(食医) 保母、谷垣、中村、錦田、村井、佐藤、広瀬、1年生 西道、酒井、高橋、打出、長谷川、佐藤、五百蔵、前次、黒木、金子、白井、宇野、丸尾^{2年}

行動記録

3月11日 平田、野田、佐藤、五百蔵、高橋、前次、の6名濁小屋へ入る。

12日(晴) 6名全員が帰ったついでに、20 濁小屋出発。途中尾根の取付に60m、尾根途中に1ヶ所ザイルフイツワスを行

たから登り、16・05鳥嶋子小屋着、荷物が多すぎたので濁小屋へ少し残して行った。

13日(風雪)停滞。

14日(晴)野田、五百蔵、前次は7・00出発し三ツ岳まで行った。お袋風のため歩けぬので荷物をテポとして引きかえす。

平田、高橋、佐藤は濁小屋に残った荷を逆ボックするため、6・45出発。10・45濁小屋着、1800鳥嶋子BH着。濁からの登りは風が強く、非常に消耗したのでナイフリッジ上に荷物をテポして小屋へ逃げる。本隊大脱走。

15日(晴)3名ナイフリッジの荷物をBHへはこび込む。9・006名にてCIを建設せんと出発するが10・30三ツ岳にて平田が不調になり、野口五郎まで入れまうにぬいので高橋と釘返し、残り4名で三ツ岳風下側に雪洞を掘った。

先登及び米林、兼清、広橋、田村を除く2名の本隊は43〜47時の荷をかついで濁小屋へ到着す。14・30〜15・30。木村大島を取付の雄察に出し、残りの着は夕刻まで翌日の荷物のふり分けを行ない、パツキングを完了す。

16日(快晴)平田、高橋は前日ハンマーを忘れていったので三ツ岳まで歩しに行く。テポ地雪洞内の4名は、9・10出発し、

二、積雪期の黒部は関するかぎり、大正15年の西嶺内等の記録よりいしかない。

三、陸奥地帯は不正確をさわめ、誤り亦非常に多い。

四、高度200m以下では猛烈なフシシエである。

五、アプローチ本長いのでテント本最低4張必要であり、テントを新しく2張作らねばならぬこと。

六、毎日積氷するのでスノーブリッジがかつていているかどうかが不明である。

七、赤沢東越附近及び黒岳周辺の難場をホツカ隊が事故を起さずに通れるか否か。

八、最後に優待メメントパーが20名以上必要である。

等である。第一、二、三の向題を解くために、33年夏から延4パーテイが赤牛岳の周辺に入つて結果、11月に野田、米林、山本、田村、佐藤のパーテイが赤牛岳頂上より尾根を下つて上越下のスコ沢出合に下り、ここから50米の徒歩をして対岸に渡りスコ沢をたつめてスコ小屋にたどりついた。その結果フシシエは非常に密であるが積雪期にはこれが完全に雪の下になるかも知れない事や、スノーブリッジが期待出来ぬ事、又スコ沢には大きな滝があるけれども春には雪崩のためにつまづてしまつ

かも知れぬ。等の事わかり、このルートが唯一つの可能ナルルートである事は、はつきりしたのである。

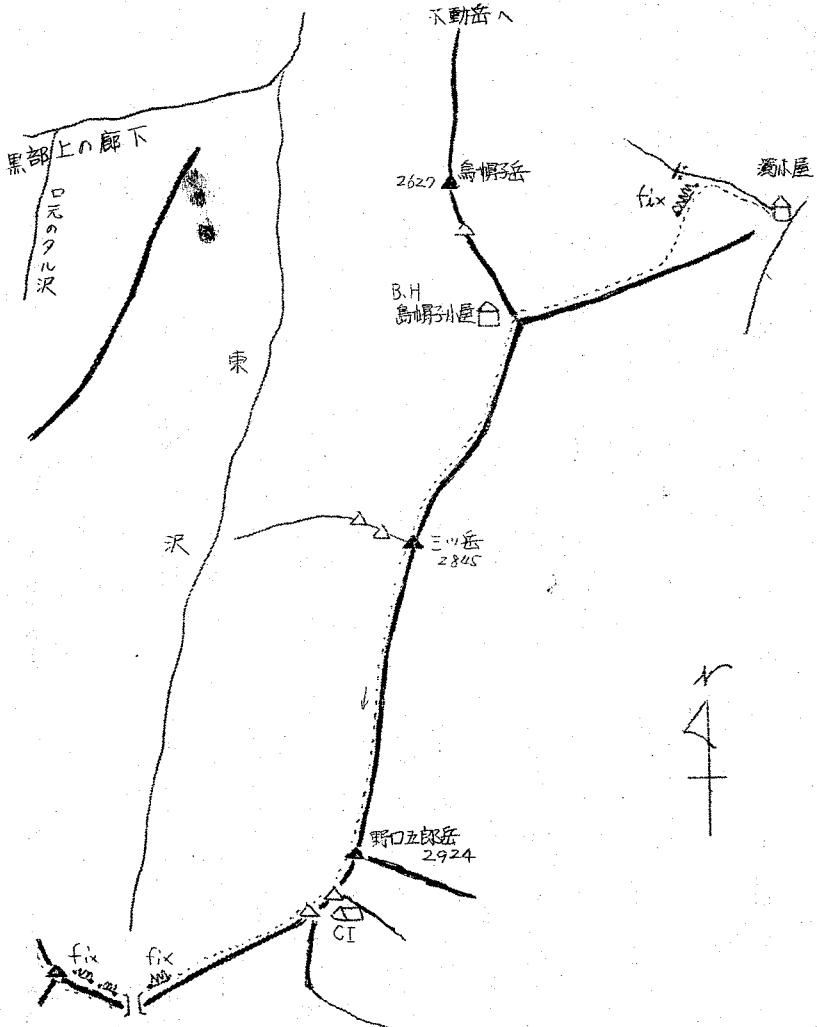
第5番目のテントの向題は33年に月に解決されたので、向題は如何にして中滑に赤牛岳まで荷物をホツカするかという事と新人に被褥で荷物を担がせて良いかといつ向題が残された。しかしこれはやむを得ない事であった。

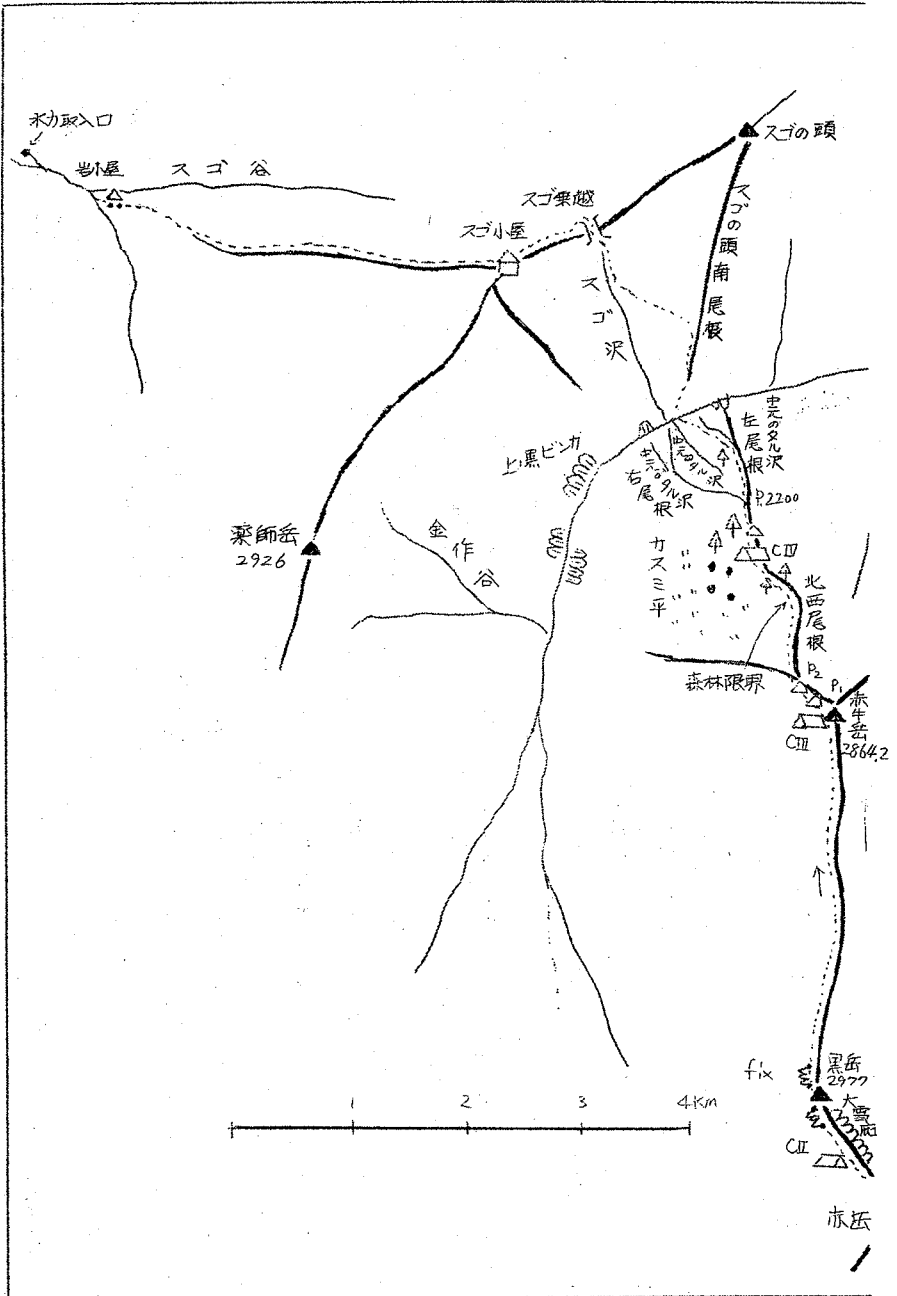
実際の行動計画は別表を記すともわかると思ふが、BHを馬帽子山屋、CIを野口五郎岳、CIIを赤岳と黒岳の中間、CIIIを赤牛岳、CIVを赤牛岳北西尾根上200mのピークに出す。そして計画を3つの段階に分け、第1の段階ではBHに荷物と人員を集結する事、第2段でCIIを建設しこれにCIIIやCIV用の必要物資を集め新人を下山させる。そして最後の段階でCIVまでX&Y&Mをせしアタックを行つ段取りであった。

尚、偵察のための山行は次の通りである。

- | | | |
|--------------|--------------|-------|
| I 兼節岳・金作谷 | 8月17日〜19日 | 60頁参照 |
| II 有降一三保・赤牛 | 10月6日〜10月12日 | 64頁参照 |
| III 三保より上榎下榎 | 10月8日〜10月11日 | 64頁参照 |
| IV 赤牛よりスコ沢へ | 11月3日〜11月7日 | 71頁参照 |

概念図





2. 行動概要

合宿用団体装備及び食糧のうち400kgを秋の荷上げにより鳥嶋子に入れてあったのを春には残りの半分360kgを荷上げせねばならない。個人装備は全費15kg以下である。

期間 3月10日〜4月2日

メンバー 8B(広橋(アタック)、3年生) OL(山本、兼清、野田) マネージマー、米林(アタック)、平田、木村、2年生
大崎(技)、田井、大工原、玉井、佐松、田村(食医)
保田、谷垣、中村、錦田、村井、佐藤、広瀬、1年生
西倉、酒井、高橋、打出、長谷川、佐藤、五百蔵、前次、黒木、金子、白井、宇野、丸尾^{2年}

行動記録

3月11日 平田、野田、佐藤、五百蔵、高橋、前次、の6名 濁小屋へ入る。

12日(晴) 6名全費28kgづつかついて37.2。濁小屋出発。途中尾根の取付に60m、尾根途中に1ヶ所がイルライムフスを行

たから登り、16:05鳥嶋子小屋着、荷物が多いが主の濁小屋へ少し後して行った。

13日(風雪) 停泊。

14日(晴) 野田、五百蔵、前次は7:00出発し三ツ岳まで行ったが強風のため歩けなりの荷物をテポして引きかえす。

平田、高橋、佐藤は濁小屋に残った荷を運ボツ力するため、6:45出発。10:45濁小屋着、18:00鳥嶋子BH着。濁からの登りは風が強く、非常に消耗したのでナイフリッジ上に荷物をテポして小屋へ逃げる。本隊大阪発。

15日(晴) 3名ナイフリッジの荷物をBHへはこび込む。9:00(6名にてCIを建設せんと出発するが10:30三ツ岳にて平田が不調になり、野口五郎まで入れさつて強風の急降と訂返し、残り4名で三ツ岳頂下側に雪洞を掘った。

先登及び米林、兼清、広橋、田村を除く21名の本隊は43〜47kgの荷をこつて濁小屋へ到着す。14:30〜15:30。木村大崎を取付の検察に出し、残りの者は夕刻まで翌日の荷物のふり分けを行い、パツキングを完了す。

16日(快晴) 平田、高橋は前日ハンマーを忘れたので三ツ岳まで戻しに行く。テポも雪洞内の4名は、9:10出発し、

14、00野口五郎氏の次のピクニックの嵐下欄に雪洞地帯を決定した
ここに雪洞を掘りテントは張られなかった。

一 古本隊は、6・10湯小屋を出発し、2・30鳥嶋子小屋着。
山本、大島、笠松、五井は松尾と荷物整理の爲めにBHに泊まる。
BHにて平田、高橋と計6名を荷物と石油缶につめ始め、CIとア
タツク食を整理する。

17日(雪、気温高くなる濃し)CIから佐藤、野田が温泉に入浴
欠、東沢東越手前にて悪天のために引きかえす。BHは掘り
続行し、夕刻完了。湯小屋には累木、文尾以外17名が黒部第5
発電所まで往復。7・46巻、10・10着る。

18日(晴)野田、佐藤CI8・45巻、11・10東沢東越着、15・00
フィックス終了。16・50テント着。

東沢東越までは尾根上は雪が深く積つて崖がかくれているの
で懸場は危い。しかし新雪が10cm積積っているので、古いコナ
ストした雪この匂いが悪い。東沢東越の登り大斜面に50米。
その上の岩場に20米のフィックス。さらに赤岳との間に2ヶ所
フィックスを行く。

BHより山本、五井、大島、高橋はCIへ各自18kgずつ荷上げを
行う。6・30巻、11・30CI着。15・00BH

湯から19名は各自20kgずつつかついで鳥嶋子へ入った。6・30
巻、14・00BH着。

19日(快晴)CIでは全食糧大停滞。GIまでのフィックスは多
しし、皆連日の行動で相当疲れてい仕のさ水曰とする。

BHより山本、笠松、村井、大工原、田井、五井、谷道、高橋
打出、保母がCIに入り、他の11名はこれをサポートした。午後は
BHからCIに新しく入ったもので、既設の雪洞の左右に新しく雪
洞を完成し、合せて15名の確保も可能になった。

BH 6・45出巻、11・30CI着。12・30サポート隊巻 15・00BH
着。

20日(雪、風烈) CI停滞。

BHは橋、氷林が入って活気づいた。BHでは少々の雪をはねか
えさるものとはかりに荷上げを続行して三ヶ岳まで到り悪風
の爲めに断念し荷物をテポして引きかえた。

21日(晴)野田、村井、笠松、佐藤及びこれをサポートする10
名はCI建設の爲めに8・05CI出巻、9・10東沢東越、11・00赤
岳東岳間のテラス上にキヤンパサイトを決定する。13・00サポ
ート隊帰る。15・30CI着。CIに入った4名及びサポート10名は
それぞれ18kgずつつかついでので団体装備20kgをCIに入れる事か

出来た。CIIにテントを張っている間に野田、村井は悪岳のフィックスに出かけ、16:00テントへ帰る。

BHからはCIへホツカが入る。辰谷川がCIに入った。二のホツカによつてBHからCIへの樹上上げが全部終了す。

先発隊が最初につく。雪洞は天井が沈降して床から天井まで60cmぐらいになり、水がホタホタ落ちている。使えなくなつて放棄した。

22日(風雪)停滯。

朝になつてみると雪洞の入口が完全に埋まつてしまつて朝といふのに夜やと感らない。雪洞入口の堀出しを半日をつぶした。

五百蔵が右脇腹が痛むといつて昨夜は一睡もしてないといふので膏腸をぬいかと心配したが、膏腸もぬいていなく、早くBHと連絡をとりたいと思つた。天気も回復しぬいので連絡を出す事だ出来た。CI、CII、BHとも停滯。

23日(風雪)五百蔵は食糧を取りもとどし高みも少し軽くなつたが、ところも歩けない、BH、CI、CII停滯。大島は病がひどくなつて養もまかない。

24日(小雪)23日夕刻から大気は回復しはじめたので21:00保田、大工原がBHと連絡のたぬ雪洞を出た。21:30強風のたぬ

危険を感じて引きかえしをきた。それむら一眠りして4日ト。00日水を含めてみると雪洞内が用済みです。風が吹きまつたので保田、大工原を起こしてBHからの応援を求めべく連絡に行つてもらう。BH4:30着

BHでは連絡を受けるとすぐ電報を打てるため丸尾を下山させ、すぐ麓まで木村と他の名をシヨイコ、タンカをとりて麓まで入行く。田村、西原、白井、中村、酒井、佐藤(毅)金子、が五百蔵をCIに下した。五百蔵は歩いて帰った。水林、広橋、平田の名も新たにCIに入つてCIにてホツカ計画表を再検討した。保田、大工原が学校の進捗手帳を是非下山したいといふので該線メンバーが不足し、仕るべく新人高橋、打出、谷原を起用する事に決定し平田は調子が良くなればCI或はCIIに入つてもらう事にした。

(I)では野田、佐藤、村井、広瀬の子を赤牛岳にCIIを建設す。CII3:30

赤牛手前12:00、CIIの建設テントはそのままにして、新テントをCIIに持つていった。急天の予定地まで行けずに赤牛手前に雪洞を掘つて入る。

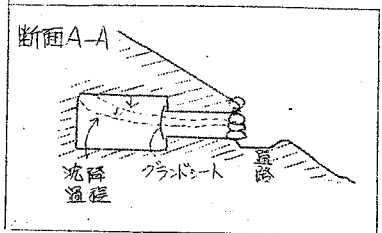
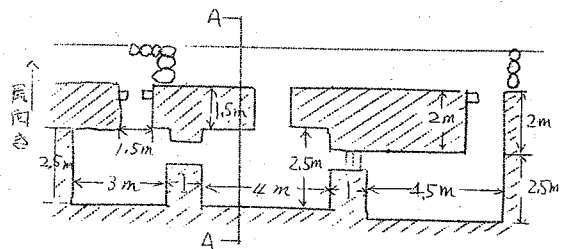
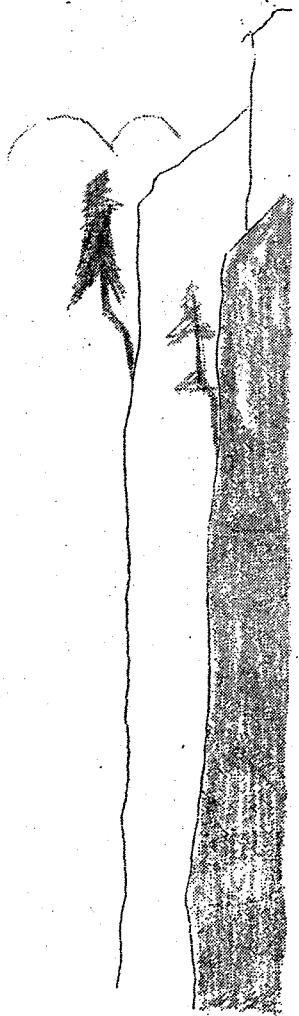
25日(快晴)BH↓CII田村、兼清CIにて各々9kgの荷を追加し

をCIに入る。

CI ↓ CI 玄橋、氷林、田井、谷道、打出、高橋の計8名が入る。CI U CI 山本、平田、大工原、玉井、保母、BH CI U CI 長谷川、前沢、ヌイム。8・00 CI 発、9・15 東沢乗越、10・50 CI 食事をとる。11・45 帰リ発、13・30 CI 着。

前日、五百歳を下し、玄橋、氷林が入つて計画をたてておしとあとの快踏で、意気揚々とうつとポッカに出発した。サボート隊は22() 24 kgの荷をかつぎCIに入り表りのものは8() 10 kgの荷をかついでよつて氷新雪もよく快踏に進んだ。

サボート隊はCIへ帰つたのが早かつたので又喜んで雪洞を快踏のように改造してヒリ干物をする。



26日(ハカス) CIは午前中境界わすかぬ定りすて風が吹れば
 危ない天候である。風櫃まで徹子を見ているに、風が吹て来な
 いので、30出隊準備を始め、平田の調子、本相変らず良く思
 いのこ一人CIに残ってもらい、14・45出隊、境界本意いのこ40
 川おきに字を立せて行くが、稜線が多いので雪庇の輪郭を
 見えなく作ったので、晴れるのを待つ事一時間半。16・30再び
 出隊、17・07東沢荒越、東沢東越をすさでから又かすが麓く返
 ってくる。かまわずこれをさきぬけて、赤岳の上につく頃、又
 焼の眞紅が竹を求めて、我々が上つたように返つた。
 西の空は雲類が広く水平線を作り赤岳には厚く曇らぬ。18・
 30CI着。山本と一箇に末を3名は天候が悪化したためCIへ帰る
 のを中止し、二つのテントに分れて入る。二箇のシムレーフを
 つないで3人入り、2テントに7名、1テントに5名を置き、水、
 全く焼原村一夜だった。

27日(收隊) 目ざまし時計が4・00チリチリと鳴った時は全く

つらめしかつた。4・00起床、玉井、大工原、保母、15 CIへ
 帰るための出隊、CIの9名はCIへ入る、玄嶺、水林は個人装
 備の上に8名、又サボートの7名は20名の装備食料を持ち、フ
 ・00出隊。黒岳のフィックスの上に積雪が20cm程積っている。

黒岳で赤大のパーティー9名水装束を揃いついて来てサイル
 フィックスの所で彼ら上先に行つてもらつた。

黒岳周辺から赤牛までの稜線は一昨年、昨午の冬や秋に比べ
 るとすつと雪が多い。特に黒岳の周辺はすつと履凍通しにトレ
 ース水出来たので、降向が大いに短縮出来た。黒岳の下りの大斜
 面はテカテカに凍りついていて積雪もほとんど凍りついていて、
 二日に野田は50mのフィックスを設けていた。黒岳から赤牛ま
 するは滑れば問題のない尾根だ。11・10 CI着、12・25サボ
 ト突、15・20 CI着、CIは赤牛岳頂上から北西尾根を50m下った
 所に建設してあった。

CIからは同日、野田、玄嶺がCIを定地のピーク2,200mで一時向
 こ下り、約2時間の登りのCIへ帰った。

- CI 野田、玄嶺、村井、佐藤、玄嶺、米林
- CI 山本、田村、赤嶺、田井、打出、谷邊、高橋(全員CIま

てサボート)

28日(豊後快晴) 收隊、野田、玉井、保母、大工原、笠松
 隊、10名、10・55 CI着、サボート隊14・30 CI着、

明け方は厚く凍ったが8時頃には雨が止み、CI CI向の時

向五分の新記録をこえ、Ⅱでは洩急斜面に雪洞を掘り雪がうぶと下を見るときⅡの黄色いテントが突のように見えることは及いぬ。また正午を少し過ぎたばかりは、馬鞍に早い。田村、村出、田井は食後Ⅱへ引きかえした。

テント設置が済み、雪洞が完成する頃Ⅱの上に3人の黒い影が現えはじめた。雪が去って快晴と成る。Ⅱ隊 8・00出発。

9・30ピーク²²⁰着、テント設置、11・00発、13・00Ⅲ着、米林、佐藤、村井の偵察隊兼井ポルト隊は玄橋、野田、玄瀬にサポートされてⅡをピーク²²⁰へ運抵(赤牛台地)にⅡを出した。その結果予想に反して雪の状態も好くⅡまではアイピンのままで行ける見通しがついた。山本、玄橋、兼道、野田、玄瀬がテントに入り谷煙、高橋は雪洞に入る。

29日(曇差風) Ⅱ偵察隊兼米林、村井、佐藤は洞窟まで下りて橋をかけた。

Ⅱ隊 4・00起、8・20出発、9・25Ⅱ着、食事、10・15出発、12・15Ⅲ着。

森林限界から下の心配していたフシニはずす。かり雪の下に及り屋根の形がはつきりしているのを視界さえよければはずすはずまぢかたの手はぬかい。このおぼりまは下ると雪がべとつき、

それまではワラストして、アイピンをよくきいていた雪が、アイピンの下に10cmも雪が田子になる様な薄雪に変わった全く始末が悪い。しかし気温は高いから風が強いにわか、わらず手帳が凍くても大して冷たく感じない。

Ⅲの者は食料の余裕が出来たので入山以来始めての薄飯を味わった。食糧の成功を祈りつゝ8・00発る。

30日(風雨強し) ⅡⅢⅣ停滞、29日夜シニラフに入ってからほん／＼風が強くなり、テントをパラパラと打つ音も聞え始め夜半に入って猛烈な風がテントをひきちぎらう人はかりに顔がぐりに吹いて、今にも裂けはじぬかと慰わられる程だ。朝起きてみると足元のひく／＼なつこい雪が一面の水たまりでシニラフトとスリノを取去ってみると、深さ10cmたらずの池にたつている。すぐれた他の雪を起してシニラフをまるめ濡れしは困るものを全部かきつけた。食後給水の二策としてブランドシートを10cmばかり十字型に裂いたら2・3分の間に水は消えた。終日雨又はみぞれが降り風が強かった。

赤牛のⅡⅢ雪庇の巻連状態が吹きまじりの様子から風が南西から吹くと判断して頂上か西側にテントを南北に張ったが、風は西から吹きあげてきたので真横につける事になった。今後一

ニテテントを棄き若し注意すべしである。CII、CIVのメンバーも
準備して出る事だろう。

31日(晦) 藤原村、打出谷麓野岳まで往復す。CII停滞、
CIVアタック出発。

CIIにて。テントのベンチレーターから見える空の色が青に変
つた。思ひはCIVに走りアタックはどうしているかと心配される。
終日テントの雪がさや干物をしほり食料、装備の整理をする。
夕食水巻ると気味さわわしを出す。20日にCIVの着て決めて来
た7:00 7:30 8:00のアタックとの連絡時刻も止まらな
くなる。連絡は先づ7:00にアタックは連絡5分間、懐中電灯で
信号を発し、それをCII CIVで確認すれば七だちには5分間連絡突
灯する事になつてくる。しかし昨日の天気の手を汚ると雪が雨
を避けて今晚スゴ沢を上る見込ぬ大きさいからおそろくま巨灯
は見えなうだろう。6:50各自ヘッドランプの明るさを確かめ
て外にこぼ出す。葉海氷ぐくと低く、日本海から西北へ水平
線を作り空との境目あたりがまだ夕日の赤みを残して赤く葉師
岳が黒々と前に立ちぬだかり鏡い輪郭がその影を空目に焼きつ
ける。右下には黒部第4発電所の照明灯がぼつきりしている。
3分前風がすくなく身にしみに寒くなり出し、脂肪がぞくぞくす

る。

しかしよく見るとスゴ沢の所はけうつすらと白くガスがなか
つているのを見える。残念なるが、これではうまくいかぬか
ち炸れぬ。目の錯覚であろうか。スゴの頭へ続く尾根の中間に
何かちらちらと見える標石がある。7時1分前(私の時計で
見よスゴの東越えはりに今までの分った灯が点滅する。非常に
明るく、唐山の町の灯では無い。いや、確かにアタックの連
中だ。藁中で電灯を付けたスゴの方へ去ける。灯りはじつ
として動かない。1分過ぎにCIVからの明りもこちらにみえた。
まずは成功だ。夢のようだが、CIVとアタックの明りが一
直線上に見えるCIVの明り本何かを言っているように思われる。四
人抱き合つたようにして互に手を振り歓声をあげてはげしくして
コルの灯が消えてからテントに入った。

4月1日 エイアールフル(晴無風)

CIV 12:00 撤収、CII 15:30(食事) 16:00 CII 停滞 7:00

アタックの後の虚脱感があるのみ。雨の後であつた水浸感か
下つたの雪が固かつた。10:00 CIIの三名水連絡の爲めにCII
到着 CIIの連中が帰ってくるのを待つことだが、14:00に有つ
ても現れなうので高橋、玄瀬と共に先に帰らした。山本、谷田

水筒をP2まで下った所でCPから敵清、村井、佐藤は重い荷にあえぎながらも上つてきた。CPに同じ七時は午後三時をすぎているが天気は好いのでCPまで入った。

4月2日(晴) 9:00 出発 鳥帽子BH16:00 湯小屋21:00

フィックスガイルをばねならBHへ帰った。BHには十人用食料が回分なく、つめて残されておったのは全く燃焼した。しかし翌日の天候が不安であったので最後のなんばりを続け、湖についた時はフラフラであった。

後 記

今後は船東から云えば成功した。又大体予定通りの行動がとれた事は幸運であった。アタックが出るまでは状況は五分五分であると思われだが、唯の一回の試みによつてうまく行ったのは、あつたかい、という言葉があるが、まるかち知れない。これは明らかに良い条件がそろつていたためであらう。しかし少し又悔しがる事がある。

先発隊は計画表によれば本隊が追いつくまでにCPを建設し終つてゐる事になつてゐるが実際には先発隊の整備が予想以上に多く、BHへ入るために三日もかかり、おまけに平田も身体の調子を悪くしたのをご計画通り行動出来ず、その精神的負担は大き

かつた様だった。出来ればもう少し荷物を軽くする様に注意するとか、絶対確実の範囲内を行動出来る様に精神的余裕を持つる様にすべきであった。

行動計画は第一段階では屋根にも難かしい所はないからというのをご序言曰く少なく見積つていたが、予想以上に天気が悪くBHの食料は不足を極めた。それに反しCP CPは食料が半分以上余り、持つて帰ればいもの多少からす放棄したのである。従つて全体として前半は食料が不足し後半は余つたのであるが、春の会宿では日々にたつてつれて天候が良くなる事を考慮すれば会宿の準備の取り方はは一定で良い様である。

隊員については、はつきり云つて非常に残念な奴らばかりだ。といつのは特に二年生の中堅部員が身体の不調や進歩手続その他によつてちよもの多くの者がCPから先に入らなかつたのである。それ故会宿を継続するために何となくしつこく新人を登用せねばならぬとなり、隊員の安全という点で大きなマイナスとなつた事は動かせないものである。

以上気のついた長のみについで述べたが、会宿がうまく行ったのは会宿に隊員全員が真面目に取り組んだことと最も大きな力となつたのだと思つてゐる。(山本信樹)

行 動 予 定 表

湯 B.H(烏帽子) CI(野口五郎) CII(木島彦) CIII(赤牛) CII(P.2200) 峠 又山區

日	先登隊6名	野田、平田、佐藤、五百刀	高橋、酒井、湯入り			
12	→ 0					
13		→ 6				
14			● 雪洞廻り			
15	本隊湯小屋に入る(20名)		● 4. 雪洞廻り	2 fix		
16	2名湯入り → 4 ← 16			→ 3 ← 3		
17	← 18 →	← 3		← 2	2 フリック と交換	
18	3名湯入り → 12	← 3				
19	1名湯入り → 3			← 1		
20					予想 停滞	
21	← 1	→ 2 ← 14		→ 5 ← 8 ← 7		
22	← 9				予想 停滞	新人下山
23		→ 6 ← 3		→ 6 ← 6		CI 撤収
24,25					予想 停滞	2日
26	← 0			→ 4 ← 5	→ 3 ← 3	
27,28					予想 停滞	2日
29		← 2	● 3	→ 3 ← 2	← 3	社会温泉
30					予想 停滞	1日
31	← 2		● 3 ● 4		→ 3 ← 3	アタック B.H撤収
4月 1,2 3,4	アタック隊の様子を見る為最悪の場合4日の停滞を見込む。					
5					← 3	
6				← 7		
7		← 10				
8	← 10					

行 動 表

(・印は停滞を示す)

日付 湯小屋 B.H(島崎子) CI(野辺郎) CII(黒、岳) CIII(赤松) CIV(P2209) 出給 備考

日付	湯小屋	B.H(島崎子)	CI(野辺郎)	CII(黒、岳)	CIII(赤松)	CIV(P2209)	出給	備考
3/11	平田、野田、佐藤、五百歳		前沢、高橋、以上6名	湯小屋				
12	→	6						
13		●6						
14	←3		←3					御物三ヶ岳下泊
15			←2	←4				本隊2名湯入り
16			←山大王、笠					先悉隊CI入り 本隊ボツカ
17	●19	●6	●2					B.HにP、キープ CIは陣次退トレス
18	←19		←4	←2				CIIの陣次ボツカ 赤松隊退までフィックス
19	←2		←10	←4				B.HがCIIにまで 第2次ボツカ CIボツカ降る
20			←11	●14				三ヶ岳山頂に泊る
21	←2		←1	←4				CIIにフィックス降る
22		●15	●12	●4				五百歳 発病
23		●15	●12	●4				
24	←3		←3	←11		→4		五百歳下山止る CI降 CIII入る
25			←1	←6		●4		P.HにスペースCII に前物人員来る
26	←3			←2		●8		
27	←1		←3	←2		●2		町田 佐藤 CII 退家
28				←3		←3		復業隊 CIV に入る
29				←4		←3		出合は退家 P.Hの準備完了
30								
31				←P.H降		←3		→3 P.H下り
4月				←		←3		
1/30				←		←3		
2	←			←		←3		

今度の計画において最も困難と云ふところは、鳥籠子より赤牛に至る長い磯線上にボーラーを展開することと、黒部川の横断であった。後者については述べる。我々は積雪期のスゴ沢出合周辺の状態を全く知らなかつたので大段において再三検討したが、大体デブりによるスノーブリッジがかかつているものと予想していた訳である。しかし3月29日IVを建設した時にこの予想は殆ど當つていないことがわかつた。勿論CIVから出合は見えないがスゴ沢の西段ははつきりと出てゐるし段以下は雪の落ちてゐる前が非常に多かつた。しかし秋に渡渉した者達の胸には水量が多すぎなければ、例へスノーブリッジがなくとも渡渉しうるといふ自信があつた。そして29日の偵察を待つた訳である。

3月29日(曇) 偵察隊へ米林、佐藤、村井(三名)は、朝七時CIVに出発。昨日大体、見当をつけておいた林に最初はスゴ沢よりずつと右より、漸次方面へ尾根を下る。秋のひどいブツシユは全く埋まりモミの本面をどんどん下る。しかし秋にも迷つた様にこの最後の尾根は非常に複雑で一度五の尾根へとぞれた。旗を沢山つけてアタックに備える。九時出合着、黒部川は少しも埋つておらず、秋と同様にさうごうと流れてゐる全く悲観

したが、とたかく橋をかけて最善をつくすことにし、大きなカシバの木を三山本切り倒し右岸の深みに架橋する。その後試みに村井佐藤に渡渉してもらつた。すると大体足首から膝位の水深でこれなら十分渡渉出来ると思極めて、更に橋を絶で固定しこゝ取へと歸つた。この際対岸を偵察するとスゴ沢下流(出合)からは用迄しか見えぬ。はしが完全に出来るので、この取越が難かしく、又西段間も西岸からの雪崩の危険が考えられるので、非常に苦しいであらうがスゴの頭への急な尾根へスゴノ頭(熊尾根)を三四百米登りそれからトラバースしてスゴ沢におしスゴのゴルへ達するのがよいだろうとの見通しを得た。ところが29日夜から30日丸一日非常に寂寥となつたので、川の溜水が予想され、渡渉に一切をたくし我々にとつて非常に危険となつたのであつた。

(米林)

メンバー、野田、米林、広橋

3月31日(快晴) 1130CIV発、1200黒部川、渡渉の後昼食、1520出発、1910スゴ取越、1930出発、2030立命大の雪洞(泊) 早朝テントの外をみるとカス、前日の雨に引きつづいて停滞

かゝる観念してゐると、7時ごろ晴れる。天気図から判断してもこの二日ほどは晴れるにちがいないといひるので、川岸にギャンプするといふ当初の計画を変更して一挙にスゴ氷越へ登ることにする。偵察の結果から考へてみて、大体おなじしい時間まで氷越へ出られよと見通しされた。但し、前日の雨で相当に増水している恐れもあり、實際スゴ氷のF、Eはかたまり水量の増しているの水登波鏡にも分る。

雨水の凍りついた装備を干した後、CIV友後にし、途中までワツペレアイゼン、後、アイゼンだけである。雪の表面だけが凍つてこの氷は半ばくそつてゐる。燃料は相当きつひ。

黒龍川の水量は心配した程増えはしないが、川幅が50メートル以上広がつてゐり、偵察隊が中洲までかけた木橋も流失してゐる。また氷村が野田のシツヘルで中洲を経て対岸へ渡り、全員がつつく。水深は最も深い処で約40呎である。流れは相當に速い水、大したこともなく全員渡渉を終え、慌ただしい記念撮影の後、鎌清、佐藤、村井のサボート隊は対岸へ引返し、別々に昼食をとる。

午後三時二〇分サボート隊に見送られスゴの踵への急な尾根に登る。下部は木の根が露出し、枝にストツクやポールがひ

つかかつて、九日分の荷物は大いにこたえる。しかし、高度をかざぐのもまた早く標高二千メートルあたりからトラバースに移る。すでに雪もしまりはじめスゴ氷の側面から雪崩の危険は去つたようであるが斜面はかなり急であるので急いでトラバースを終えて広くひろげたスゴ氷の上部に出、ヘッドランプをつける。

スゴ氷越直下で七時、連絡の時間である。成功の合図の灯は赤牛缶の方へ向ける。とすぐ、CIVに灯がともり、つづいて赤牛缶の頂上のCIVにも応答の灯がつく。薄暮の中に氷もうとしいる赤牛缶のシルエツトの頂上レ中後、二つの灯が明るくい屋のように輝いて思わず「バンザイ」、「マツタゾール」と大声をあげるがもとより聞えるはずもない。

氷越に出た頃から濃いガスが出て、ヶ30の距離はとれない。尾根の方向を誤らぬよう、地図と磁石を慎重にスゴ小屋へ向う。途中立命大の雪洞を発見、動められこ泊る。アイゼンバンドが凍りついて仲々とれむ。立命大は9人で知し積り復の計画だまうである。

4月1日(晴れたり曇ったり)1020出発、1030スゴ尾根シヤンクシヨン、1410尾根先端、1610北壁取入口(泊)

成功の満足感をさばせつつ稜線をたづねる。スゴ小屋は全く雪に埋もれて、その位置さえもわからない。広橋のBの休暇の都合で薬師岳登頂を止めて、下山する。赤牛岳に別れを惜しんで快適なモミの林の中を下る。薄くガスがかかっている時々小雪がちらつく。尾根の下部では雪の状態非常に悪く、幾度か引っくり返る。残った荷物がいまいましい。スゴ谷支流の渡渉は前回はかつたが、火薬庫のゴルへ登る斜面はひどく急な上、雪がくさつていてトップの女橋のBは大いに苦しめられる。このゴルから先はもう発電所のトンネル工事が始まっていてにぎやかである。取入口まで少しぶりの壘、願言、蒲団、それに電気。

4月2日(快晴)→取入口登、12時千寿ヶ原到着

快晴の空に薬師岳の登頂が出来なかつたのをくやみつつ、殆んど雪の消えた軌道を下る。今年はこのあたりでは例年より一ヶ月ほど雪融けが早いところである。千寿ヶ原の附近ではすでに桜の花が咲いていた。

(野田)

4 食糧報告

部にとつて長年の目標である黒部上廊下線路が達成された今年の一年間食糧計画の面から見なおしてみる事も、必要なるに思われます。先般諸君の批判をえ、又今春より2年部員になれる諸君の参考にすれば幸いです。

一つの計画が行われる場合、「行動予定表」と「食糧計画」については、食糧一人一日分の重量を正確におさえる事を考へて(出来れば梱包重量も含んで)行動予定表が、まず第一に決定されるべきです。これにより初めて各ギヤムプに必要総量算出でき、献立表と結びついて具体的に「何がいくら」必要であるかがわかるのである。計画作成の際担当者の連絡が不十分で、食糧計画が常にその犠牲にこれ、出発間きわだたはたしななければならぬというのが現状である。事実この為行動表は変つたのに食糧表の変更を忘れ濁小屋に於ける必要量に大変狂誤りをおかしていた事々、現地につく迄気が付かなかつたといふ有様であった。

以下各項目毎に、今回の報告と今後への問題表をかいてみま

す。

A (一) 献立内容について、一人一日食料約160円を二鹿の巨費とした。計画上は、62以下行動日155円、63以下行動日150円とした。待滞日はこれより50円近く安い100円前後である。

(四) 費用の事には、冬山の反動と春山計画に對する部費の意気込みとによつて抵抗は少なかつた。今回は各部費の滞山日数が非常に多様であつたから、数種のグループに相分けて合宿費を集めたのであるが、散集法に於ける問題は、部としての行動という名の下に、下の者への者の分を一部負担した事である。これは部費から出すべきものであつたと考ふる。

(b) 重量は容器の重さ(例)コンソメチニープ)も含めては約少し越える程度であつた。

(c) 整置、栄養価に關しては山日記の數値を用いた。つまり、表に示す様な献立の下に、「魚肝油肉目利ソーセージ、計知多従つて蛋白質は大體足るだろう」といふ程度の計算を、後から行つたのである。この表の數量自体は、費用制限とこれ迄の経験とによるものであつて、それ以上の意味は持つていない。山日記に主張されている朝食夕食の比を一對は対応はせよとの意見は、朝の炊事に時間を食わぬ、現業に行動中腹がへり出すと

バテル、の二笑からへり入れたつもりである。
次に具体的にみていく。

(d) 朝食 主食をパン、ソバのどちらにするかは意見の分れた所である。但し實際にテントに入つてからは、あまりこの差は問題にされなかつた様だ。積雪期のテントでは、水作りが炊事時間とせざるを得ないだろうが、スープと紅茶(砂糖湯)で代えると、空缶につき又出発時間も早められるのではないかとと思われるが、必ず栄養価の數量がとれぬと判断した。

全般に「油(バター)が多すぎる」という者もあるが、これは熱量源として更に利用すべきである(但しその吸収率が問題となるが)食用油と称してマーガリンを用いたのは、これがレードよりも空缶だったからである。

牛野菜に對して各部費が何々期待しているのかつかめなかつたので、その取扱いに困つたのであるが、ビタミン補給の意欲なら錠剤を使うよりも、ホーレン草を例にとると、簡單な操作で重量を多にする事が出来るのであるが、この自家製食品から、便通がよくなる(?)以外に何がえられるのかは、我々にはわからなかつた。この為なら切干しを充分である。

調味料は常に標準量以上に使用される傾向がある。計画当初

からこれを昇越していては費用のかゝる事明白である。どこでミツ、エンツメナカレト粉（即席カレエ）をなして、味を主体として、その他の高くつく物は全期間を越して数回使用するにとどめたい。つまりは安い物も多くという事である。但しカレエ粉のミ友使用するのは、たゞ最低ですむといつても無理な様である。ナイハン素が表玉にある程度の一回量でよいなら、これからも使えどろであるが、油揚はあの程度の使用量で四一これ以上は無理で單なる飾りである。

(c) (夕食) モチ、これは辛佃をぬらつたが、研にて広島大學より譲られた物と比較すると、その質の差は明白である。しかも米よりは高い。当初、全キャン行動日に夕食のみ使用を計画したが、これもどこ迄かは出づかつた。他の大雪山岳部ではオートミールや一度ふかしてから天日に干した米等を雨にしている所もある。金と重量のわくの置方によつては現在の主食の選抜を根本的に改める必要がある。鯨肉を全量消費と大量に使つたのは、一応冬のテストに合格したからであるが、その保存法には議論百出である。今回は「ラード」によるから揚げをやつたのであるが、その準備の際の苦勞の割には放棄少なかつたと思ふ。というのは、辛佃を量に食べられ鯨特有の香もぬけて好評

であつたが味をぬけてしまつていた。(時間にはまられた。調理の初めに蒸湯きとおして氷凍をあげた) 又あらかじめ適當な大きさに切り、大体一定量を取りエチレン袋につめておいたから、テント内での取扱いはしやすかつた様だ。家で聞いた他の処理法は、①肉と同量のミソで両面を日ごめば夏期でも一ヶ月は保つゝ相当からくなる事にも手をうつ必要がある②サイの目切にしてラードであけて、塩コシウ等で味付けしておく。

③一ヶ月以上の長期、温度湿度の高低変化にも大丈夫の事。④薄切して相當量の醤油で少々こげつく迄煮つめる。シヨウウチ等を用いる。なお今回冷凍肉で用意した為、氷を食べるはめに返つたのは不注意であつた。鯨肉の使用量を増やせば、魚缶の様には缶の無狀をすることがなくなる。例子の内、実に60子の缶を背負つて迄ゴーン、ピーフを使った理由の一つには、④に於ては高度が下る為、鯨肉の保存に自信がもてなかつた事がある。

(5) (朝食) パン(特にウンナロール)の越冬が大変心配であるが大阪では予想出来なかつた。電氣冷蔵庫に入れておいてもそんな風にはならなかつたが、一応水分の凍結による硬化によるが主であるウレ推察される。幸而も、單に火にあぶるだけで

うまいと感じられた。同じ越冬しても特製パンの方が食べやすかつたのは、この方が生産時から水分が少ないという事のほかにも理由はある様だ。ウインナロールを食用油で揚げるテストも少々はやつてみたが、結局副食を多めにする事で、ゴマ化ス事になつてしまつた。五丁入チコレートバターがそれである。なお朝食時にはスープと組合せる事で越冬でも大して問題にはならなかつたと思つてゐる。さうさう自家製ビスケットの試作を考へる動きが出はじめであるが、全面的に特製パンを使用出来なかつたのも費用の差からである事を忘れてはならない。一般に、一日を通してばかりではなく毎食に於ても、「必要量が必要量だけある」のが望ましい。特に今回の様に長期にわたる合宿では、コンディションの調節を食事の面からも考え、単に数量だけを追求してはいけないと思ふ。この意味から、色々の反対もあつたが昼食の臭ソーセージは特した。但しソーセージは費用の差で落した。これは予備食として各人携行すべきである。

夏ミカンはホツカ時の水分不足と、とにかく新鮮なものといふ点から、少々無理反りて用いた。これは冬山食糧より受継いだものである。皮が厚いから破損の分は計算に入れなかつた。スキムミルクは多の22%の話を聞いて、或はホツトケーキにで

もとの意味から香テントに少量づつつけた。キートンのいる陣では夏山合宿に於けると同様に、キャンピングに備蓄した時に飲んだ。適当な量に入れば、粉乳砂糖バター小麦粉の混合物を、パンの副食として携行する事も可能と思ふ。さうすれば合宿シヤムは遊放できるのではないか。但しこれはテントキーパーがいる時の話であるが。

五井君試作の「ナメシ」は、予備食非費食としても利用できる。越冬したか成分に分離してなかつた。

中華ソバは、調理の隙に注意しないと厨子になる。

(2) 今回上級部員の希望もあり、所謂「うまい」物をハイキャンプに重層的にまわしたのであるが、「湘山日数の長い」事をもつて「うまい」物を要求する理由になるであらうか。計画全体の立場からは、「うまい」に金をかける事は出来ない。キャンプの上下を問わず、「うまい」(質のよい)従つて単価の高いものをを用いる時には、そのキャンプの行動内容を具体的に考えに入れた上で、合宿全体としての目標追求からくる必然性がなければならぬ。

(3) 行動 停滞による区別はほとんどつけなかつた。計画の長期化に伴う消費の増大に驚かして、消費を減らす意味で、停滞

食の費を一方におとすのは誤りである。朝食は出勤を前提としてとり、夕食は翌日の行動を前提としておこなう。行序の別はたいはすである。昼食については、現実には動かないのであるから、主食と副食を別食とせずとも、費用の差からやむを得ざるもの、行動日にはさされた、日付の定つて居る停滯日では前日の夕食から昼食迄、つまり一日分だけを停滯食としてよい。又合宿後半に於ける撤收時の停滯日は、明日は動く予定されている日では昼食以外は停滯食とせずともよい。この様に考え、朝夕食に於ける行序の別は形のみにとどめて特に朝食に於ては之の差をテント毎にすかした。旧行動夕食に於て、共に停滯食に近いものであるとはいへ、上下ギャンプ向に差の差、従つて又費用の差の出来た事は前述の通りである。昼食に於ては、嗜好物の食物を差をつけた。

(6) 別に於てギャンプ毎に配分する段階になり、数種にわたりモチ、調味料、特製パン等—その絶対量が大きく必要量を下まある事を知つた。議論の本、重量的にしむせきを受けたのは、パウエマンン時に別であつた。他からの補給をえられず、燃料量の不足してゐる時でも、目標達成を目ざして統一行動とするか否りに於ては、所謂「先の長い」方を優先するの当然である。

この意味に於て「食いのほし」を考慮せざるをえなかつたのは食糧計画担当者としては残念であつた。こんな事態を避けるために「先発隊の取扱」「停滯日数の取方」を再検討すべきである。

B「梱包、取扱について」(一) 重量は24kg

(1) 費用は冬の場合よりも割高に上つたが、これを示された一斗缶の羽突—乗下車もボツカ時の簡便、内容物の保護—を認め、全面的に採用した。但し缶のエンジは注意を要する。なおカートンボックスとパンの組合せが、雪中でも長期保存に使えてとの報告(法大)もある。

(2) 各食品の包装にポリエチレン袋を適用されてゐるが、固形以外のもの—例シマム—には、どうもそのまゝではなかつた。今春のチヨコレートの好評の一因は、その取扱の簡便さにあつたと考へる。所謂「腹を食つ」失心らも大して肉類になつたから、完全回収を前提条件として、既加工食品とポリエチレン袋との組合せを、將來考えていきたい。合宿に於てはレーシヨニステムは無難なようである。

C「撤収時の残余食糧回収について」

我々も、食糧計画をしたる時、これは大きく金から制約を

うけているかき考えると、残余食糧は出来るかぎり持帰るべき
 にはなからうか。帰後後ルームに集結された残余食糧の管理は食
 糧係が行い、公平に配員にたえすべき事は勿論である。全般に
 及ぶぐいの悪いの今次期の台指計画に大きくひびいてる様に思
 えてならぬ。

なお、秋ホツカ清食糧については、該当する表を見られたし。

(笠松)

一九五九年度 山岳部役員

チーフリーダー 野田憲一郎 経済学部四年

山本信樹 工学部機械工学科四年

兼清喜雄 工学部精密工学科四年

米林外茂男 工学部応用化学科四年

平田 彰 経済学部四年

尚、OBの尾藤昭三氏を監督として、広橋俊氏が副監督と
 してそれぞれ現役の指導にあたりれる。

秋に荷上げした食糧

食糧 383 kg (缶の重さを含む)	パン	1,450 個
	マーガリン	57ポンド
	ソーセージ	90本(180食分)
	カンヅメ類 (サバ・マグロ・コンビーフ等)	60 個
	中華ソバ	280食分
	砂糖	29 斤
	スープ類	30 箱
	その他	レーズン、ジュースの素、×ゲン、切干、 味噌、塩、コショウ、ジメム、ピーナツバター、ワカメ スキムミルク、メリケン粉、ナメシ

以上を62個の1斗缶、4個のカートンボックスに梱包した。

(表 I)

春山全食糧表

品名	品目	単	B.H	C1	(A,B,C)		C3	C4	A	合計	金
					C2						
	パン W-R	64ヶ	464	80	230	134	78			1050ヶ	9450
	焼製		68	134	118	50	30			400ヶ	4000
	モチ	64K	52	22.5	375	20.1	7.2			146ヶ	18341
	小麦						20ヶ			20ヶ	720
	中華パン	16	30	25	93	21	12			140ヶ	6300
	メリケン粉	1袋	6	2	3	3	3			20ヶ	300
	豚肉	23K	19.5K	5.3	8.8	4.2	1.0			35ヶ	4700
	玉ねぎ	(1ヶ)2	60ヶ	30	50	23	12			175ヶ	1800
	魚三カシ	8ヶ	30	14	9					60ヶ	1800
	コンソウ	2本	8	4	4	4	2			25	1900
	チキンパン		α	α	4	4	3			15	300
	ポタージュ		4ヶ						別表	26	1560
	カレー		0.24K	0.12	0.3	0.7	0.07			0.86K	60
	味噌	0.6K	5.2	2.3	3.8	1.3	0.7			14ヶ	1100
	調理用マカシ	3本	76	9	9	7	4			46ヶ	1300
	油揚げ	6枚	22	11	10	4	3			62枚	620
	砂糖	1.0	5.5	3.0	4.0	3.0	1.0			17.5ヶ	2000
	塩	0.5	2.3	1.1	1.8	1.0	0.6			7ヶ	320
	ゴシヨウ			1	1	1	1			4本	80
	スヤムミル		2	1	2	2	2			9ヶ	1040
	ワカメ	3	4	1	1	1	1			11ヶ	80
	飲料 紅茶	0.15			0.25	α	α			0.45ヶ	250
	ジュース		3	5		4	3			20ヶ	800
	厚食用マカシ	9	30	20	26	14	8			107ヶ	5130
	魚ソーセージ	16	56	38	30	13	8			160ヶ	4320
	臭塩		25	15	23	12	7			82ヶ	2300
	コンビーフ缶					3	12			15ヶ	1950
	切干	43	1.6	1.2	1.3	α	α			2.5ヶ	120
	乾木レーン草					α	α			α	
	Xサシ	0.7	3.3	1.4	2.5	1.0	0.6			7ヶ	1400
	ジメム		α	α	α	4	3			7ヶ	420
	チョコレート	6	23	15	12		3			25ヶ	2130
	レーズン(大)			3	4	4	3			14ヶ	1260
	ナクミン		α	α	α	α	α			10ヶ	200
	シケモノ				1	6	3			10ヶ	200
	(約)ローソク	8	30	18	30	19	11	9		125ヶ	
	(約)ケロシン	1本	5	3	5	3	2	1		30ヶ	
	食糧総重量	25kg	200	100	135	85	50	25		620ヶ	
	装荷		15	26	27	28	30	147		140.7kg	
	食糧総額	4400	24000	12300	17700	10700	7800				77000
	全重量	760kg	735	520	400	233	120			760.7	
	果積値									kg	

【この内約 38.0kg (食 32.5kg 装 5.5kg) 残荷上ず改】

【又パッキング用ナリ缶の重さ(1.2kg)費用(30円) 含まず】

[表 II] C3 C4 にかける行動日の献立

各々への献立 標準1人1日量	朝 食				金額		昼 食		金額																																																										
	C3 C4		C3 C4				C3 C4																																																												
	数量	♀数	数量	♀数			数量	♀数																																																											
パン Wiener roll	27	200	/	/	18円	パン	W.R	/	18円																																																										
樽バ 玉 蘭	1/27	150	/	/	22.5		神戸製菓	27	250	20																																																									
缶 阪 急	/	/	67	300	32.5	パン	銀ハス	1/67	38	8																																																									
α米 鷹 西	/	/	6/3袋	2/3	48		シルカシ	1/67		8.3																																																									
ス ー プ 類	30人用 ソノソノ	1/30	13/10	15/7	12/10	5.3	魚ソーゼ ージ	1/27	70	13.5																																																									
	ベル フーハン	1/6	73/5	1/67	83/5	4.0 3.3	飲 料	Xト シユース	1/6	19	6.7 8.0																																																								
	フォー ポタージュ	1/6	30/23.4	1/67	30/23.4	13 11		紅 茶	α	3.8																																																									
	カレー粉	1/12	3	1/12	3	0.4		スル シロ	/	/	5.8																																																								
	ミン	/	/		30	2.4		ジュ ウ	1/67	76.7/61.7	10																																																								
食用油 リボン マカシ	1/21	10	30本	10	1.4 1.3	鳩	レーズン (大箱)	1/10箱		9																																																									
刈リン粉 300g入	1/30	10/9	/	/	0.5	好 品	フ フ フ	/	/	7.6																																																									
油揚 豊用	1/6	4	/	/	2 1.7		豆	夏ミカ	/	/	5																																																								
魚缶	カツオ フレーク	1/6	/	/	/	4.8 4.0	刈リン粉300g入	ナミシ	α																																																										
	サバ ミーズ	1/6	55	/	/	6.4 5.5					0.5																																																								
鯨肉 加工品	/	/		50	6.7 9.3	砂糖1斤(600g)	1/20袋	30		3.5																																																									
コンビーフ缶	/	/	1/67	41.7/31.7	21.7	<table border="1"> <thead> <tr> <th>献立表</th> <th>朝 食</th> <th>昼 食</th> <th>夕 食</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="2">油</td> <td>行</td> <td>32</td> <td>32</td> <td>32</td> </tr> <tr> <td>停</td> <td>/</td> <td>/</td> <td>/</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">B</td> <td>行</td> <td>112</td> <td>112</td> <td>113</td> </tr> <tr> <td>停</td> <td>40</td> <td>40</td> <td>40</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">C</td> <td>行</td> <td>25</td> <td>25</td> <td>25</td> </tr> <tr> <td>停</td> <td>/</td> <td>/</td> <td>/</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">C</td> <td>行</td> <td>59</td> <td>59</td> <td>51</td> </tr> <tr> <td>停</td> <td>56</td> <td>56</td> <td>64</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">C</td> <td>行</td> <td>25</td> <td>25</td> <td>32</td> </tr> <tr> <td>停</td> <td>42</td> <td>42</td> <td>42</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">C</td> <td>行</td> <td>15</td> <td>15</td> <td>15</td> </tr> <tr> <td>停</td> <td>24</td> <td>24</td> <td>24</td> </tr> </tbody> </table>				献立表	朝 食	昼 食	夕 食	油	行	32	32	32	停	/	/	/	B	行	112	112	113	停	40	40	40	C	行	25	25	25	停	/	/	/	C	行	59	59	51	停	56	56	64	C	行	25	25	32	停	42	42	42	C	行	15	15	15	停	24	24	24
献立表	朝 食	昼 食	夕 食																																																																
油	行	32	32	32																																																															
	停	/	/	/																																																															
B	行	112	112	113																																																															
	停	40	40	40																																																															
C	行	25	25	25																																																															
	停	/	/	/																																																															
C	行	59	59	51																																																															
	停	56	56	64																																																															
C	行	25	25	32																																																															
	停	42	42	42																																																															
C	行	15	15	15																																																															
	停	24	24	24																																																															
生野菜	玉ネギ	1/6	39	1/67	2	↑上表中 α印はそのうち 1つを減らす こと。																																																													
	キャベツ	/	/	/	1																																																														
	ホレ草	α	α	α																																																															
乾野菜	切 干		5	5																																																															
	ホレ草	α	α	α																																																															
	ワカメ	/	/	1/3袋	0.4																																																														
パン	銀ハス	1/67本	29.2/25	/	6.8 5.3																																																														
	シルカシ	1/67本	/	/																																																															
缶 精製		3	2	0.1																																																															
Xザシ	/	/	1匹	10	7.3																																																														
漬物 新進漬	/	/	1/67		3.3																																																														
茶	/	/	α	5	1.1																																																														

5. アタック食糧

ナポルトンを受けず幾日も行動するアタック隊の為に本隊のそれとは完全に分離した食糧計画が必要となり大工原、玉井が担当し、梱包の際、田井、保母が加わって作った。その基本方針は「軽く」「カロリーが多く」「調理しやすい」等であり、費用の事は余り考えに入れずにし、この方針に従って作ったものは表の通りで、三人5日分である。軽量化の為になるべく乾燥状態にする食品を用い、塩蔵を使わず多くポリエチレン包装を用いた。これにより梱包後の全重量は30kgに切る事が出来た。又調理しやすい様には完全なレーションシステムを取り、凍刑で軽い又米を全面的に使用した。食糧のカロリーの多い事も重要であるが、その蛋白質の量にも注意した。ビタミン特にCは不足であったので各自錠剤を持参しこまらった。使用した食品の主なものについて説明すればコンミート(白木の製品でプラスチックフィルムで包装してある燻肉入りのもの。軽く安価)塩辛いコンブ(へたつかぬシフダにて軽く塩味を煮い)乾燥ホレーン草(熱湯処理後陰干しにカリカリのもの。元の重量の約

半分(乾燥した後天日で乾燥)コチコチに割ったもの。小さくきざんだ)ドーナツ(鹿角粉乳を多く加えヴァニラで香をつけつけて揚げた)調味料(スープ、カレーは一回分ずつ分けてポリエチレンの小袋で包装)塩コショウ、砂糖はスズムシルコン二箱に別の小さいカートンボックスに梱包した。

結果として、三日ほどしか使わなかったのは、さりとて重い(水)

一、軽量、高カロリー、簡単調理という点では成功したものの為一日の食費が二五〇円位になり、アタックの人には買ひ難であった。

二、梱包は各レーションの袋を大きな塩ビのシートを数枚、カートンボックス(大々個、小々個)に入れ紙テープでシールし籠をかけた木ボックス中に箱が湿り形がくずれた。これは箱にペンキを塗り、背嚢子で運ばは防げるであらう。一斗缶は重し割に小さいので不刊である。

三、食糧は味も食から食からられるよう変化のあるものを選んだ。水は二リ目水多すぎたようである。

四、レーションのこともっと朝夕の食事に変化をつけても良かったと思う。(五井)

アタック隊用食糧表

行動日 1人1日

全量 3人 × 8.5日分 29.5kg

950g
250円

	品 目	重 量	包 装
朝食 (三人一食分)	α米(尾西ライス)	3 × 160g	厚手ポリエチレン
	ポタージュスープ素	60g	薄手 "
	日水コンミート	100g	プラスチックフィルム
	マーガリン	30g	硫酸紙
	塩フキコンブ	30g	ポリエチレン
	乾燥ホーレン草	30g	"
	茶		"
	一人分 250g 900cal. 上記3人分をまとめてポリエチレン包装		
昼食 (一人一食分)	ビスケット	10g	}
	クッキー(カレー、バター、チーズ)	60g	
	乾パン(アルパン)	90g	
	ラスク	30g	
	栗オゴン	25g	紙
	ドーナツ(自家製)	50g	ポリエチレン
	のしいか(味付)	50g	"
	甘納豆	50g	"
	ブドウ糖玉	4粒	"
	チーズ	25g	アルミ箔
チョコレート	15g	ポリエチレン	
一人分 350g 1350cal 一人分をまとめてポリエチレン包装			
*	別と併用として量のすこしずつ多いものを作った。		
	一人分 280g 900cal (チーズは入っていない) 一人分をまとめてポリエチレン包装		
夕食 (三人一食分)	α米(尾西ライス)	4 × 15g	厚手ポリエチレン
	スープ { コンソメ	1粒	ポリエチレン
	カレー	20g	
	日水コンミート	100g	プラスチックフィルム
	ハム(スライスしたもの)	110g	セロハンに真空包装
	マーガリン	30g	硫酸紙
	棒ダラ	60g	ポリエチレン
	乾燥ホーレン草	30g	"
茶		"	
一人分 350g 1300cal. 上記3人分をまとめてポリエチレン包装			
その他(全)	塩(食卓塩)	500g	塩化ビニール
	砂糖	600g	ポリエチレン
	ゴシヨウ	1本	ガラスビン
	スィムミルク	10人分	塩化ビニール

6 装 備 報 告 生 口

冬山の経験にもとづいて計画をたてたのであるが、ギョムンブが四つになり、アタック隊がテントを持つて行動するという以外は殆んど冬山と同じであった。たゞ部の共同装備も老朽化しギョムンブを四つ出すには不足部が多く、個人所有のものをかり集めると共に、かまりの金額のものを新しく購入した。

新しいビビロントメントは冬山の経験から、風の強い赤牛の稜線では猿轡が少なく不安定なロムケ所がホールの中間から猿轡を引取ることにした。

炊事具については、石油コンロ(容量8L、ガス噴出式)ラジウス中型、コックフェル二組を購入した。バーナーを購入するにあたり、特に注意したのは、部分品のスペアが容易に手に入るか否かという点である。ねじ一個を失なつて使いものに陥らぬことと氷柱やとはしばくあつたのである。最近、船装バーナーの部品の日本産製造しているらしい。しかし部分品を失して失われようには本がねはねらぬことは当然である。

燃料はケロシンを使用したが、冬山と同様一人一日30mlの割合で計算した。乾燥用として特別に考えなかつたが、不足を感

じなかつた。秋に荷上げしておいた分は(1/3金)缶の蓋をハンダづけしたもので、運搬時の衝撃でハンダがこれ、石油がもれていゝのか多数あつたので、半分しか使用できなかったと考へて計算したが、殆んど減量しておらず、結局、計画通りの量の余裕ができた。

CIではテントを狭くす雪洞を三つ掘った。窮ゆる隊大式といふやつで、従来通り、ブランドシーツの古いものをノレン式にバグとめて内と外のしきりにした。風向によつては出入り口は完全に埋没し、又、ブラ、ドシートと雪壁の隙間から雪が吹き込んで、毎朝除雪に苦勞した。又三個の中二個は天井の沈降著しく、一週前後には殆んど使用に耐えなかつた。今後従来の方を改善するだけである、雪洞の研究に目をむける必要あると思ふ。冬山装備表は別表の通りであるが、秋に荷上げしたものは次の如くである。

ケロシン 40kg、 ガイル(30ml)5本、 竹(旗竿) 30本

(大 島)

春 山 装 備 表

品 目	単量	BH	CI	CII	CIII	CIV	attack	数 合 計	重量 合計
ナイロンノ号 (4人)	7.8kg		/					1	7.8kg
〃 2号 (4人)	5.2						/	1	5.2
ビニロンノ号 (4人)	11.0			/				1	11.0
〃 2号3号 (5人)	12.0				/	/		2	24.0
スコップ 大	1.6		/	/	/	/		4	6.4
〃 小	1.0	/	/				/	2	2.0
ノゴザリ	0.5	/	(3)	(3)	(3)	3		3	1.5
グラブシート	1.5		4	2				6	9.0
ツエルト	1.0					/		1	1.0
ザイル テリノ (40m)	2.0						/		2.0
〃 麻 (30m)	3.0						/		3.0
〃 Flex用麻 (50m)	3.0	(2)	3	3	2	2		12	36.0
パンマー	0.5		(1) → (1)	→ (1) →	/		/	2	1.0
カラビナ	0.15		(20)				3	23	3.45
ハーケン	0.05		(12)	(2個 不発眼を移動)			5	17	0.85
糸 糞		20	20	20	20	20		100	
竹 竿	0.08		20	20	20			60	4.8
バーナー	1.0	/	/	/	/	/	/	6	6.0
石油コンロ	3.0		/					1	3.0
ナベ 大	2.0	/						1	2.0
〃 小	0.5	/						1	0.5
コックヘル	0.8		2	/	/	/	/	6	4.8
ヌカ ン	0.25	/						1	0.25
シヤモシ	0.25	/	2	/	/	/	/	7	0.35
カスアミ	0.5	/	/	/	/	/		5	2.5
タタ	1.0	2						2	2.0
ヒわし	0.25	2	2	/	/	/	/	8	0.4
修理具一式		(1)	→	/					
テルモス	0.9					2	3	5	4.5
クロシンソ 4個	4.0	6(4)	3	5	3	2	/	29	80.0
ローソク	0.06	38(8)	18	30	19	11	9	125	9.37
合 計									234.7kg

B、Hの中()内は場小屋で使用するものである。

メンバー 山本(L) 水林(SL) 兼清(SL) 平田、木村、田端、平野
田村(尾) 大島(隊) 佐藤、大工原(後)、玉井(後)、村井、田井(後)、
中村、錦田、公塩、長谷川、五百蔵、白井、西直、宇野、打
出、前沢、高橋、酒井、黒木、金子、以上28名。OB 左藤、
西川、近、宮本、東、以上5名。

12月22日 先発隊、兼清、佐藤、打出、前沢、高橋、酒井、
18・09 大股巻。

12月23日 先発隊 高山—神前—柳公小屋 正午に柳公小
屋へ到着し、午後白出沢出合までトレースを行つたが積雪は
少い。

12月24日(曇) 8・00小屋巻、尾根に取りつき森林帯を偵察す
る。CIギヤムアがどうにか獲れる場所を13・00見出し、そこに上
部へ1時間遡り14・00朝食する。食後すぐヒトツヒ、カス水
巻くて全く網取がまきかき。

本隊22名、18・06 大股巻

12月25日(快晴) 本隊は柳公小屋へ入る。

4・54高山着—5・50巻(専用貸切バス)—8・25蒲田着
9・00(トラック)巻—10・00分隊共に下車、12・00全員
柳公小屋集結、13・00—16・00スキーとワカンをつけて出合

附近まで偵察をかめて定ならしに行く。

車の手配も十分に行き届いていて、簡単にBHに入る事も出来
た。また雪はごく少く蒲田ではまだ積つておらず、白出の出合
でもせいぜい2尺程度であらうか。

12月26日(多雲) 5・10起床、6・20巻、7・50 8・15取
付、10・45 CI 13・30テントに入る。

朝からじつと降つたが降つてはたかなげを進行する。
白出の出合から、ルートは白出沢の中を約500m上る。左手の
西尾根斜面の途中に1ヶ所だけ樹林の切れ目の中20mぐらいで
主尾根に向つてまっすぐに伸びている。積雪が不十分であるの
と、草の露かたおれているので、ワツパなうまく雪の上への
つてくれぬ。主尾根上にも積雪量は30〜40センチ程度か。
根の稜谷林の中に笹がはじ繁りストックや荷物さんさんひっ
かかつて、夏のフッシュニミと大層な匂い。尾根の上に行くに
したがって急である。取付より2・30時間CIギヤムア隊に到
着したる尾根がせまい上、勾配もさついのこない場所もない。
少い雪をかき集め木の枝をひいてどうにかテントを張り(吹、
山)を張る。吹きれの中を登つたので全員すが濡れで寒いこと
おびただしい。

二月廿日(雪) 附体滑、CI11・00発 14・10、14・25デボ地発
15・00テント着。

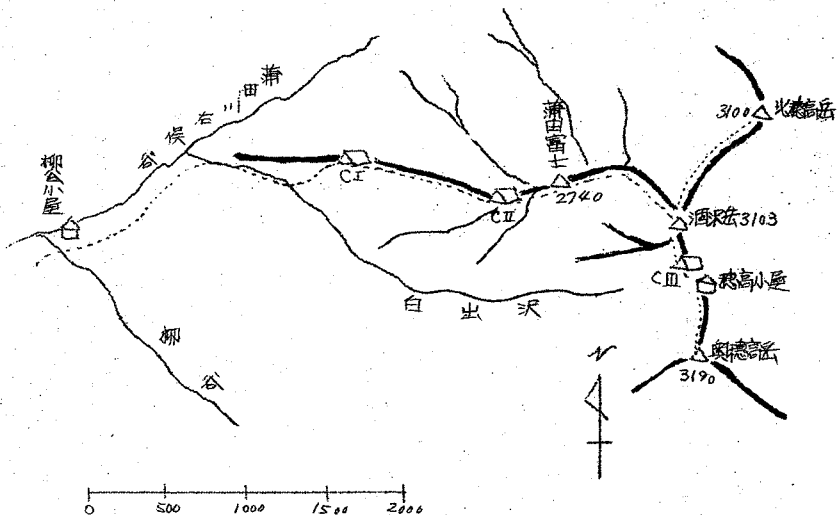
7時頃まで気液高くぬぎれであつたの水雪に変わったので、ホ
ツカをする。各自10分、CIのすぐ上で履根が急傾斜になつてい
るのでこれを丘へまぐ。トラバースの雪の状態も悪かつたから
ここに30分のフィックを行う。ザイルの頭端は縦にくくりつ付
た。そこから30分に若と下校のまざり会つて中をくぐりぬける
ようにして30分も登ると40分程の岩のフェスに行きつまる。雪
がかぶさつておらず、ホールドがぬいのでここに30分のフィック
スを行いワカンを引いたままこじ上る。このあたりから尾根は
細くなつてくるが少し歩きやすい前がつづきテントの張れそう
な所もある。ここより30分程で再び岩が尾根の真上に露出して
いる所へ来る。新雪で見えない割目に注意して通過。その上で
60分の急な岩が露出しこいる。これはアックスすれば問題ない
1400尾根の上が少しひらけた所にデボを止して帰る。12月21日(ロ)
小雪) 8時30発 10時30分着 1200CI西面隊合流して出発 1400
深いラッセルの急斜面 1430デボ隊下山 1600キヤムアサイト
着

天候悪化を予慮したが8時からボツカ隊が10時30分に着く。又

ラジオで天候回復をキマツチしたのでCIメンバーも合流して出
発。デボ地隊通過後も、ぐんぐん高度を高める。時々晴面も見え
て来る。やがて履根が明るくなり、急な急斜面があらわれる。
雪崩の出さうなほど急な斜面。長とも40分はある。雪面の右
端を踏まごもぐりながらラッセルをする。附隊は右側の現れは
じめたあたりで荷物を下してすぐに下山、CIのメンバーは、フ
ワフワの新雪に悩まされながら薄田富士直下湖位の尾根のシマ
ンクシムまで荷物を上げた。CI泊りは平田 兼清

12月21日(晴) 附高橋 谷垣がCIへ連絡に1730発 他の新入
客大工 東 西垣 金子 長谷川 宇野 白井 五百蔵 恵木
酒井 前次は槍平へ行く 1200広橋(8)来る 1430広橋 田井
中村 平野CIへ出発。田端村小屋番。CI1000発—CI1400山本
米林 木村 大島 田村 佐藤茂 玉井CIよりCIへ入る。
CI1000発—1435洞沢吊—CI1730兼清 平田村CIより頂上まで
フィックスをする。

12月30日(快晴) 起床600分出発10 1345洞沢吊 CI1400
キヤムアサイト 1430サポートCIへ 1640テントへ入る CIへ
アタクメンバー山本 平田 田村 大島が入る。サポート水
林 木村 兼清 玉井 佐藤



行動予定表

行動日のみについでの表である。

行動日	BH(柳谷小屋)	CI(森林帯中)	CI(第田富士)	CI(酒沢峠) 火鉢 奥蔵
1	⑧ → ② ←	V ₁ V ₃ ⑪ ⑫		
2	⑤ → ⑤ ←	④	N ₁ ⑫	
3	⑤ → ⑩ ←	V ₁ V ₃ ⑤ ④	N ₁ V ₂ ④	
4	② →	② ⑤	V ₁ V ₃ ④ ⑤	V ₂
5	⑦ →	④		③ 火鉢 奥蔵
6				
最終キャンプ位置		V ₁	N ₁ V ₃	V ₂

図中 ⑤は行動人数

⑪ ⑫ ⑬ はピニンテント、1、2、3号を示す。

行 動 表

日付	精 田	(橋平)	新 穂 高	柳 公 明	白 出 火	C I	テ ポ 1,2	C II	C III	興 徳	北 徳	南 徳	吉
12月 23 日			⑥		③								先着入る
24					④								
25 ○			②										
26 ◎ 31/1					③								
27 ⊗							③						
28 ◎ ⊗					④		②						
29 ①					⑤		⑥		②				
30 ◎ ○	柳公明				④				④				
31 ⊗	平湯行												
1月 1 ⊗									⑤				CIIア外興徳屋 にやる
2 ○									⑤		②		下9-17 成加す
3 ⊗	飛騨乗込												
4 ⊗									②				
5 ⊗							②		②				
6 ◎ ⊗					④								

がものすこつにるいねん」といいます。北穂までのバランスの悪い所が多い事を考へると安心して大急をたつて行く自信がな
い。全く気の毒であったが、田村と奥穂へ行ってでもさう手に
七。

ツサリの所は雪があまりついでおらず、鎖を利用して下降、
洞沢谷は洞沢側をまいて上へ上へ。この付近雪の傾斜は45度を
してトラバースは一人ずつサイクルを確保しなから通つては危ない
この下降は雪のつぎエ合が甚く危険を感じる。その次の小ピー
クは尾根本細い。洞沢側は急な雪の斜面、尾根すじはラッセル
が添くて登れぬので雪崩の危険を感じつつアンサイクルして
洞沢側をトラバースする。これからは尾根筋であるが、ルート
本はつきりせず、箇所を浪費した。特に湯谷側は西風が不十分
猛烈に吹き上げて吹雪になり目もあけられぬ。夏道の上へ積
つた雪はガラストして所々青米も見られた。

北穂の鞍部を越えかけた風をよけて昼食。
湯谷は出来るかぎり尾根上にルートを取つたのが比較的早く
帰つた。
一月三日(雪) 丑井C1 ↓ C1 ミニで 打出、大工原とテント
を撤収しBH、

C1 C2は停泊する。近辺雪本OB C1 ↓ BH
BH 東(山) 前沢、谷屋、高崎、飛騨乗越往復
一月四日(風雪) C1 C2停泊、田端、佐藤、C1入撤収サ水
トに登つたが、北穂渡りのためのひきかえす、中村、前沢、高
崎C1へ残りの積物をとりに往復。

一月五日(雪後閉雪) BH停泊、C1より田端、木村のころか
前日に凍結に失敗したのであまり好い天気ではなかつたが、C1
へかけて出発しては夜線は西風が強くC1に着いた頃は指の感覚
がなくなっていた。ちやんとその頃C1でも撤収中であつたので
テントを撤収してから田端、木村の手は不安なのでもやむを得
高小屋へ入る。両名とも相当ひどいらしく、刺刺を訴える。微
温さ上層間以上温めて小屋に泊る。名工屋工大の4名と同宿し
七。

一月六日(雪) 6:00 穂高小屋発、9:30 C1着、4:00 C1着
5:00 BH着。
夜半に入り屋空に突つたので未明早くから準備して天候悪化
の事々に急いで下山して、

(山本信樹)

2. 食糧 報 告 口

この冬山計画は、春山登山と廊下横断のためのトレーニングという形であった。この目標、食糧計画も又、春山のための試験が主たる目標であった。その献立を表上に示す。

1. 献 立

- 一、粥で朝食、水炊きする豚肉のごま食は米を使った。
- 二、C以上では、餅、中華ソバを主に使った。
- 三、張白源として、初めて豚肉を使った。
- 四、初めてアタック食を作った。
- 五、十八日分二千二百円の限定の下に量も十分にすることに主眼とした。

六、朝食を作り始める頃は、まだ行動が滞りかほっきりして、いろいろの普通通なので、朝食には行動食、停滞食の区別をつけなかった。

七、ポッカ食料別に準備したので、計画を立てる上の簡素化のため、どのテントもほとんど同じ献立とした。

2. 梱 包

BH以外はすべて一斗缶を使用し、C3回、C3回、C4回のポッカで上げる様にした。又このポッカが止つても、各テントには日分以上の食糧がある様に荷分けし、缶の表には、ポッカ順、重量、内容等を各テントで色分けした表をつけて、手ぢないの起らぬ様にした。尚、今度から新たに梱包袋（佐藤）も出来たので、食糧係は計画の立案と買出しと専念出来たのはありがたいかつた。

3. 一日分の梱包及び重量

一人二千二百円の台指費の内、食糧の分は一人約二千円である。これ十八日分の食糧を作ったから、一日分百二十円で、最近贅沢化しつつある食糧をぐつと引きしめることが出来たと思う。重量は各テント共一日、八〇〇g程度（梱包共）を普通である。Cはけは、もう少し軽くしたかつたが、値段の差から出米はなかった。

4. 各食糧の使用状況及び評価

餅は一個30gのもので、一食に二コ食べる様にした。適量と思う。パンはウイーンナロールを使つた。今度の台指で最も不評判のこのパンで、その固さたるやコムパンと打ちまらぶた十たつては程である。このパンを、台指後大阪へ持ち帰つたら

再びヤカラむくむつたことからみて、水分の供給が原因らしく
今後はビスケット等水分の少ないものを併用してゐる必要があるので
と思う。「玉蘭」という草葉は圧縮乾燥してあり、持ち方は
こびり便利で調理も早いから、値段の割に量が少ない(40g・22円)
味は乾燥したものを出発日に購入、約30gづつポリエチレン
の袋につめて、これを汽車の向はデッキに置いておける位によ
うにし、BH以上は雪にうめた。CI以上では固く凍結してしまつて、
最後まで使用出来ずが、BHでは雨も降つたため、30日に全部使
用した。今後も高度の低い所では、缶詰と併用するのが望まし
い。乾燥野菜は大根の葉を干してむのを作つてみたが、天候が
不順で良いものはあまり出ます。CE・CHにはめいわくをかけた。
止ま干したものであり、一回さつとゆで干したものはうす水成
績が良かった。(1)栄養価はほとんど悪であるうすな乾燥野菜の
代用に切干を用いたが、次第に評判は良くなつていく様で心強
い。「おかん」は四角箱をそのまゝBHに上げ、ニンニク各デパート
に荷分けした。非常に評判が良く、今後は野菜の少くなる冬春
には使用するべきだと感じた。尚箱の約一割はくさるものと覚悟
してこれだけ余分に購入すべきである。調味料はいつもの台箱で
も不足勝ちであるので、今回は思いきつて増量したつもりだ。

だが、やはり不足で、BHでは肩にひびかいた。みぎは一食30g
以上、他の調味料も公孫二人前以上を一食に計算せねばならぬ
い。大ナベを使つての料理の時分、もつと多くてもかまわぬい。
5. その他

一日百二十四ではどんなものが出るかというところ、我々
三人の興味があるのである。結果的には、天候が割に順調で、予
定より早く計画が進んだので、(四)以外は食糧が余り、後半は食
い放題となり、余り文句も出さず食糧家としては、誠に有難かつ
た。この栄養のぬいものは、すべて省くという方針から、「お
茶もぬい」ということで、相当又何が出た。お茶のあるぬいで
相当気分のちかづものである。行動用食糧を行動計画表に従つ
て行動日の数だけしか作らなかつたのも失敗だつた。天候の悪
い日も半日だけ動いては、連絡が止まり、余分の偵察もあつた
りするからである。今後は停滯食の一食は行動食に切りかえら
れる構想ものにしておくべきだと思つた。又今度の様にテント
向の距離が短く、ボツカも多いたが、従来重量の奥から捨
てられていたシヨウウもなにも持つていつて良いのではぬいかと
思う。

6. アタック食

パン	1065個	ハンド	1g
米	427合	文 干	500匹
餅	22.9kg	ソーセージ	65本
中華ソバ	147袋	オシロイ	200玉
ミ ソ	12kg	塩	2kg
マーガリン	36ポンド	ミカン	120個
コンソメ	440食	切 干	2kg
玉ネギ	166個	スキムミルク	15kg
乾燥野菜	500g	アック食	
ワカメ	10袋	レーション	16袋
サバ缶	17個		
カレー粉	3.3kg		
鯖 肉	24kg		

冬山全食糧

各キャンプの食糧

(1人1日 1.1kg 約120円)

キャンプ	食数	重量 (kg)	備 考
B.H	545食	185	ホト薪があるの で米主食
C.I	327	130	/
C.II	306	105	アタック食10 袋を含む。
C.III	95	28	アタック食6袋 を含む。

献 立 表		主 食	副 食
朝 食	停滞 の 区 別 対 し	B. H	水10合エフ1個 みそ25g 玉ねぎ1/4、ワカメ、ハク、文干1匹
	行 動	CI-CII-CIII	a 12個中華ソバ コンソメスープ パター1/2ポンド
		b	、エフ1個 みそ20g 玉ねぎ1/4コ、バター1/2ポンド
昼 食	行 動 日	CI-CII-CIII-BH	パン3個 ソーセージ1/2、1/2ポンドオシロイ、ミカン1個
	停 滞 日	、	中華ソバ1/2袋 コンソメスープ 玉ねぎ1/4個
夕 食	行 動 日	B. H	a 米1.5合 コンソメスープ、玉ねぎ1/4、ワカメ、文干1匹
			b 米1.5合 カレー20g 玉ねぎ1/4、鯖70g、文干1匹
		CI-CII-CIII	a ちまこ個 みそ25g 切干10g、
			b 中華ソバ1/2 コンソメスープ 乾燥野菜10g、
停 滞 日	B. H	行 動 日	夕食に同じ (みかんなし)
	CI-CII-CIII	行 動 日	夕食aに同じ (”)

一応献立は上の様であるが実際の運営は各キャンプの食糧責任者に任せ、(1日1回)決した

アタック食は、昨年の春山の経験から、初めて作つた。二回
 程試作して見るなど量の決定には苦労した。一応表裏の豚足
 ものを作つて見た。チコロレート等の嗜好品をもう少し増やし
 たいかつたが、価格の安からずまんした。一袋で大体二食分の量
 があるが、アタック隊はこれを二人一袋と、別に一般の食糧か
 らパンとこの副食を二食分携えし、これで一晩のピバークには
 十分の量である。使用後の感想としては、量は十分であるが、
 ビスケツトは固にねちやっついて食べにくかつたところであつ
 た。尚アタック食作製には係を別に一人(節田)をおいた。一
 袋80円で他の食糧より相当高価であるが、これだけの効果は十
 分なところと思つた。

◎Ⅲの食糧状況(田村の報告による)

Ⅲの食糧は行動二日分、停滞4日分であつたが、実際は7日
 滞在し、撤収の前日Ⅲからニを相加わつた。はじめ食糧不足し、
 三日頃から食いのけしき行つた。Ⅲの食糧法から若干の副食が
 加けていたため、Ⅲの食糧は相当な及ばないものであつた。今後
 の計画には後継隊は行動一日に対し、三日以上の食糧を見込む
 か、別に予備食を用意する様にすべきだと思つた。オマケとして
 アタック食に入つておいてヒヨコアは非常に好評であつた。(大工原)

3. 装 備 記 帳 簿

装備に關しては、春山にまねて、いかに荷物を運ぶかとい
 う経験をええることと、新しく作つたビニロンテントの性能を調
 べるのが主な目的であつた。ケロシンはⅡに上りすぎるなど種
 々不手際はあつたが、大体装備はつかめた。

新しく作つたビニロンテントは表面が大きく、ブッシュの中のⅡでは
 ×マン・パイトを空けるのに苦労した。又、大きさと高さの割
 に張線が少なくⅡでは少なからず強風にあぢられたようである。
 燃料はケロシンを使用し、一日一人30mlの割で計算した。実
 際、Ⅲでは40年一ヶの四人が丸一週間生活した。十分に使
 つて後二日分の余裕があつた。

共同装備は春山の表とほとんど同じなので省略するが、概略を

テント	ナイロン2 (内新入台商1)
	ビニロン3
ツェルト	2
パーナー	6台
ゴツェル	5個
ナベ(大)	2
ローソク	74本
寸 斧	25本
赤 旗	60枚
ケロシン	(4kg) 9
ザイル	Fix用200m 多量用兼300 7mm 40m

計を示す。
(大島)

新人スキー合宿 報告 (平湯)

新人のスキー合宿は昨年より冬山合宿の前半に参加の後、行
う兼になり、今年も初め検平と行つて予定であった。しかし検平
の小屋が崩壊で使用出来なくなつたので、山落の寸前に平湯に変
更となった。現役からはリーダーとして冬山合宿の方がスムー
ズに行き早くはな建設出来た場合は兼務が冬山合宿の方の予定
が違れれば場合は田村も変更することになっていた。

冬山合宿の日はかなり順調に行つたので、12月31日にBに兼
務が降りて来、玄橋が高山時にBを出発して平湯に向つた。リ
ーダーの兼務は一日遅れて参加した。平湯での宿は連発の手ち
水いから初め野田が予約しておいた所に行かなくて、この冬
はスキー場はほとんど雪が少なく平湯もどうにか滑れる程度で
燃料面などの快便は不可能で基本的な事を練習するのだけとな
らあつた。この様にスキー場を宿を利用しての新人合宿は効果
がなすい振に思われた。

期前 12月31日(1月5日)

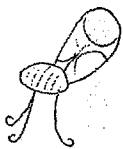
メンバー 兼務(シ)、五台殿、酒井、長谷川、西垣、金子、白井
宇野、栗木、玄橋 (OB)

(兼務喜雄)

総会報告

本年度の総会は12月30日6時40分より記念館一階の
桜大食堂で開催された。藤田先生をはじめ、新保、徳
永、大島、尾藤、坪井、宮本、玄橋、西川、高水の諸
先輩も出席され、現役も29名であつた。

玄橋OBの司会ではじめられ、藤田先生の挨拶につづ
き昨年度合宿報告、会計報告、新リーダー(野田)紹
介、藤田先生の外遊の証(別項)、自己紹介を兼ねて諸
先輩の現役の幾人かの話、等が行われた。



一九五八年度

夏山劔合宿報告

星野

昭和三十三年度も前年度に同じで多くの新人が入部し夏山合宿も四十人以上の人数となった為、今迄の様な合宿形態では全員に完全に向かふと云ふかゝるのさ新らしい試みとして全体を二つの大きいパーティーに分けて、それぞれにサブリーダーをつつけ別個に行動するものにしたが、合宿場所は同一にした。

計画の概要は合宿中の荷物全部と確定の荷物の一部をかつかし称名から八郎坂を上つて二日と真砂沢出合の合宿地に入ることにし、縦走の荷物の一部はケーブルとバスで追分へ上げた。

期間 七月十六日〜七月二十六日

メンバー 兼善(SL)、山本(SL) 野田(SL) 米林、平田、乾、田端、平野、木村、広瀬、田井、佐藤、大島、村井、大工原、田村、笠松、玉井、三宅、森村、金子、谷垣、九尾登、伊藤、西畑、前沢、保田、錦田、比嘉、吉本、五百藏、森田、黒木、北橋、長谷川、中村、丸尾、打出、菊池、酒井、高橋、佐藤(T)

7月15日に先発4名(野田、平田、大工原、高橋)が雪山に行き、米、野菜、バス迄の準備をした。

7月16日 本隊大隊発。

7月17日(晴)称名までバスで行き、ミニでケーブルで上げた縦走の一部分の荷物以外を全部かついで出発した。約40時、この日は前夜の車中の疲れもあり、又、最初から八郎坂の急坂を登つたので追分止りであった。

称名発9:30 — 追分出発 16:30

7月18日(晴)追分から一気に雷鳥沢を登り真砂沢出合に着いたのち6時であった。すでにキャンプサイトが完全にふさぐてこの日の夕方からじめ予定した通り真砂沢出合を一段登りた二股側の草地を利用してキャンプサイトをたてた。

追分発7:00 — 天狗平9:40 — 雷鳥沢下12:25 — 別山乗越14:25 — 真砂沢出合18:00

7月19日 曇一時ニワカ雨

昨日が遅かったのさ今日はグリセード、濃霧停止迄の練習のみを行つたことし、12時から長次郎の雪渓に行つた。

7月20日(雨) 停滞。

7月21日(曇) 今にも降り出し相を大変であつたので全鼠一箱に氷の谷のヨルまで行動す。

7月22日(曇一時雨) 予定通り合宿に入つて初めて各パーティに分れて行動する。途中再び降られた。最初の行動日なので尾根を歩いて休むをちらすことにした。

源次郎尾根、ハッ峰上半、ハッ峰下半、三の窓—平蔵谷、7月23日(雨) 停滞、出発するも、すぐ雨で引き返す。

7月24日(曇午後一時雨) 毎日いつ雨が降り出すか知れない天気なので当には手を出さない山歩き、今日の行動も2日と入ンバーを入れたにだけであるが、パーティが噴砂穴をつめて別山のうへ登つた。

7月25日(雨) 停滞、今合宿も予定は今日で終りにあるが最後の日も後日雨が降り通してあつた。

7月26日(曇、雨) 名工屋工大の人に天気図を見せてもらったと台風が本土に近づいており明日晴れ可成り確率はすいこの一日の食糧準備はあつたが相談の結果今日撤収することにして、東西に噴砂穴を出発したか子孫の出会いを過ぎたあたりから雨が激しく降り出し、剣沢の小屋の所では新人等は相当表れてい

た様であるが、乗越を越す頃から雨もやみ風もおさまつて二人の落伍者も行く高尾庄の所まで降りた時は一時晴であつた。相談の結果このままテントを乗ったのでは衣服が完全にやませずぶ濡れなのを確実に一人や二人は病入らぬものと思われたのでその夜は雪場庄と高尾の湯に分けてとまらば、着くとすべ全噴温泉に入れて病人の出るのを防いだ。

合宿を終つて

今年の合宿は雨に降られ通して漸定に行動することはできなかつたが、パーティを二つに分けたことは統制をとる上において成功であつたと云える。今後考えねばならない事は合宿期間をもつと長くして雨が降つても行動日が増える様にする事である。又天気の方も気象通報を聞いてある程度判断をくだせる様、通報から忙しなわけをおくべきである。

撤収の時の悪天候にもかかわらず、二三人を嵐邪に守つただけですんたのは幸いであつた。

(兼清孝雄)

ヒマルチユリだより

—— 徳永篤司氏への手紙より ——

住 吉 仙 也

昨日(月) 暇をきますと主婦。まご指い。明るい上高地(マ
ルー)を期待してYentの外空のまごと、雨こそ降ってない
かどんより曇っている。まだ早いんだから、日本出外は晴れる
かも知れないと懐かしのシニラーフの襟を合せる。

まごく期待外れ。加えて出巻の頃から雨と来た。着き残り
左半の荷をまごし、まごり黒光る世にスリッパすること二度。ジ
ガートに書く頃まごの懐かしの白射を見る。Judson, Opentata
と無線アンテナ、フェット回線が近い海の波をぬき Opentata
のまごろう。まご部署らしい形影はあるが、まごの繪にまご
の歌をみはる土人の奇妙なる対照を感じさせる。

ユパール (Judson Opentata) が出巻の際見せた。父
親、まごの儀式。ユパールなる本故にマナラパン中は自然す
ること父親に約束して出巻する。しやくは険なシニルバの食事こ

主婦を打ちながら、毎日き愉快に過す青年ユパール。

首都カドマンスよりわずか数日の Caravan であれまごの
この東地へ。畑を耕し、木を切つて毎日を送る農生活。恐ら
く言葉を通じないのまごつ。それにしても暇の前を通り行く敷
夜の *the moon* のまごのまごつまごつ気持だまごつ。まごの、おまごの
火事なまごまごつ。そして朝、夕、何を考えているまごつ。
水を運び、塩を送るクワイ、フェットと人の行商。

診療をまごにくるまごエ入。すでに末期症状の先天性梅毒地、
まごのまごまごも失脚し、鼻孔は閉じ、嚙型になるまごつ。二
ヶ月も療養が無いまごつ。三ヶ月という勘定まごつしてレ
たのまごつ。

此回を展中「未開」「原始」という事に気付けた。水まごの
通りなんだ。Opentata、父照像機を持つて任んまごつ。

しかしこれからの支那湖は？

ジマガートよりモンスーン、ルートの高き路、又西にボツボツ降りたり止らざり。晴孔向、青空のバツツ、頂に雪をのけて白い峰、その下立つ兩岸の岩壁、ゆるやかな線の標的に草を食む牛の群、絵に見えるアルプスの風景のまじり。それを前に食う唇の美味い事。

田舎落ちて屋々たきりめき出した、対岸高く青白い雪が吹く
N. S. Bergelme 在 R. B. 27. 11. 1900.
(Sachiko)

ニマック出發の時、松田、山野井と三人でキマラパンを離れて裏山に登り、ヒマルチエリーを始めを見ました。中々壯観でした。

「氣まぐれ帳訂用：—キマラパンに降りてつぎの事をしてその後帰する矢先、後線チヨルテンのある所に出で着いた。丁度シマラマ映画の始め、イントロダクションに次いで画面が展げられる如く、左から右に殆んど視野一杯の広さに、雲一つない稜靑な空、ズラズラ漣く米の峰々、巖々とせまる黒い岩壁、そしてその下にはナムローリン、ユローリンと左右より描く緑のカーブ。

ルビナ、パウターピーク、真中に一際高く高くちりちりを正する如く聳え立つヒマルチエリー、右には東麓根が幾つかのスパイクを後線を描いて出る。我が目を疑い、ボー然として眺めることしばし。更に左に峰を駈けると、派々と線につなまれて、白きブルガンダキの流れを越えて、ガネツシエのランプーが、又又線の上に白い頂を昇せている。カマラを横し、スケッチする。両向亦有いのみ残念……」

始めにヒマルチエリーを見た時の印象です。

ナムローでは大したトラブルもなく50 Rs. とナムロー村民を P. 27. 11. 1900 とするといふ条件で入山出来たし、四月四日にテランの谷に入ったわけです。

「氣まぐれ帳四月十四日一部訂用：—

ニマック、ナムローの米はもと「もろ」が多い。今日の夕食はラクパ、テンジンなを採り別けてはせいか、或は、ナムロー向題が怒った火りスムースに行つて今、山懐、雪を身近にしたせいか、特に美味かつた。

ノ、チギンスーア、マ、チギン、サマエンドー（乾燥）、人参、乾燥したジマガイモのシチエー、3、モミヤ石の殆んど

なバライス 4. ジマパニス・テイー(レモン・テイー)にし
 こスイートミン・Fを入れる) 食後ヤマンブ・ファイヤー
 で暖る。

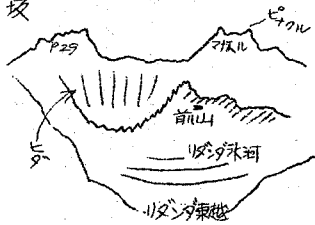
(小生のテントにはる後、木村、山野井、住吉の四人)
 午後九時、木村風邪気味(ヒバル十四錠、ダブル・シメラー
 下にする)

山野井、腹空りませんか? 住吉さん 住吉、俺もへつて、
 木村、食いすぎで胸にもたれる。石坂はすてにグーグー

四月五日、村木、石坂、私、ガルツエンとシニランB、C偵察
 四月六日、リシニランB、C、建設、入日暮んと戻る。

四月九日、村木、石坂、住吉とリダンダ乗越C、偵察
 快晴で、マナスル、P29がよく見え
 ました。P29はマナスルがヒマルチニ
 リーの稜線広いならんも、東面は
 完全に垂直な壁です。この尾根も垂
 直に近く、目前山との稜線は細く瘦
 せてみせががです。

四月二十日、C、テント建設(村木、石坂



住吉、竹田泊る)

四月十三日、C、偵察及テント一つ建設(村木、石坂泊る)

小生不慮な女位、頭痛その他症状が起きせん。このまじ上
 に行けるものか、或はもこと高い所でも高山病症状が現はれる
 のか?

毎日元気でヒマラヤの景色をみかす眺めています。コンペー
 ス・マックスには春が訪れ、一日一日と雪も溶け、校草や可憐な
 花が咲き出しました。ブリガダギ(大きい谷川)の上にかゝ
 った春霞も足下に見下され、その遥か彼方には白い雪と氷河、
 黒い岩のヒマラヤ連山が、果すんぞと見え青空に、槍の峰
 に鋭いスカイ・ラインを見せしています。

C2建設も完了、C3偵察とマックスサイト決定も2日、村木、
 石坂、私と三人で滑し、一昨日、昨日とBCへ降って休養しまし
 ました。今日再び登ります。今度BCへ降って来る時(五月廿日)
 廿五日位)は成否も決定してみます。

今後は

- A班 松田、竹田、ガルツエン、グンデー、もう二人
- B班 村木、田辺、ニマ、テンジン、他シエルパニン

C班 佐吉、山野井、ダワ、トングツッパ 他シエルパニ人

D班 石坂、他シエルパニ人

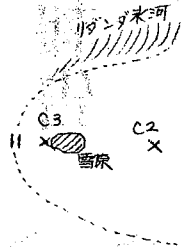
E班 木村 アン・ダワ

に分割して行動します。次の第三段階はCへの橋上とC4橋梁及び
決定で、五月四日頃Cに降りて集まります。

C3はヒマルチニリミ嶺正面に見えるヤクタイ所です。向に大き
な氷の洞窟(ヘリダングタとチネーリヤン・コーラの氷河の分水嶺)
があるため、C4はC3より低くなるのは良いかと思われ、
例のシメンツルム・トラバースは実際は何でもなく通過しまし
た。しかし、最後の壁は思ってたより高いです。真正面から
見ると、傾斜は分かりません。C1よりみ
たマナスルのエプロンも中々急峻な
す。

Cは約六三〇〇米。唯今の所、私
不思議な位高度の影響は全然あ
りません。又って気味悪い位
です。

今年は今候も遅れて
いるらしく、20日計画
マナスル

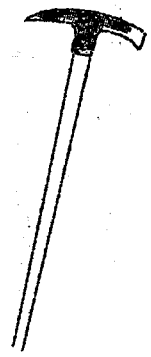


P290

これは、朝大時半頃BC4.C13.C225といった調子です。しかし、
一昨白位からは快晴が続き、本調子になった様子です。

只今マダボスト・ランナーが来ました。手紙を受け取り、皆そ
れぞれわくわくしています。が、これからC1に A・B・C班
は登るのであわただしい風景中です。

私にはまだ一通しか来てないので、アマサリ登って行く
く。。。。。。。と城勢の言葉をかけてはいますが、誰もしる
かのもたへ、再び腰を下して筆をとりました。



一九五八年度

一般山行報告

劔岳池の谷左候

期間 4月27日—5月3日

メンバー 西川OB 兼清、野田

4月27日(曇後雨) 10・50伊折発、13・00ゾロメヶ谷事務所

13・25発、13・55馬場峠荘(泊)

西山地鉄上市駅からバスで伊折へ。ゾロメヶ谷事務所へ入山の
登録をする。馬場峠荘以上市町界で新しくとけいがある。まだ
無人。

4月28日(快晴) 7・30出発、13・40池の谷出合産傾察の後、
14・25発、16・30××キャンプ。

白萩川の3字峡附近で川原が切れ、10時から1時間、草つき
とカラ場の大さな高橋を登りられる。池の谷出合は深い廊下
で大滝の処では大き反クレピ入るまでさている。暗い廊下が明る
く展げると、真正面に左候がまつすぐ三の窓へとつき上げてい
る。夏には出合から二ニまで、小窓扉根を巻くまうだがそのル
ートはよくわからぬ。池の谷を連れて二ヶ所だけテントを張
れる所があり、××キャンプする。

4月29日(晴) 7・20出発 8・45二候 9・15発 15・10三
の窓(泊)

今日の目的地は目前に見えてくるだけに始末が悪い。谷の両
岸が見事な垂直の壁であるが全体の感じは明るく、斜面はゆる
り急で、うっかりザツクをすべらせよつものぼるまをまち一日
分並もどりである。三の窓の夕日が美しいと聞いて来ると天候
のせいかな、大したことはない。

4月30日(晴) 9・15出発、13・25池の谷コル、14・10発、15
05飯笠頂上、15・45発 16・25池の谷コル 17・05三の窓
帰りは早月尾根を下ることにし、空身を頂上を登り、まず明日
と備えて三の窓から池の谷コルまでの急なレンゼをステップア
ウト・バケマスステップを切る。後線からの東面はすばらしい。

ノックを縦走しているパーティーが見える。相当手をすわっている。
オックス

5月1日(雨)停滞

前夜から風雨。ナイロントでは全く無風の風上の野田の
キャンプは「チマンコ」

5月2日(曇後晴)6:50出発、池の谷コルへ二回ボツカ、9:
35池の谷コル発、10:20長次郎コル、11:30頂上、12:40発、
14:45早月尾根二六〇〇m附近(泊)

急登頂上には沢池ヶ原から大勢の人がまわっている。早月尾根の
急場は割合簡単に通過するが、雪が完全にくまらぬので一歩毎
と踏みださず、慎重にやして早々にテントを残る。夜快晴と
なり、満月のシナンゴと照り、黒い岩と、青白い雪がするどい
コントラストを見せている。志村得ぬ夜である。

5月3日(快晴)7:00発、11:35瀧場島荘、昼食、14:00シ
ロクモ登陸所、15:35伊折

予想通り、朝の雪がすばらしくしまっていてアイゼンが快道
にくま、感勢よく下つていけると松尾平をすたすた迷ってしまふ。
瀧場島荘すばに着く、三日連休の初日女々の登山者が多い。

(野田)

千丈沢から双六

期向 4月27日〜5月3日

メンバー 義、米林、平田

一論帽子——立山の縦走計画をたて、それは計画としては良い
ものであったが、実際に行けたのは双六小屋までであった。

取られた日数にしては計画が過大であったこと、三ッ候——太
郎湖を監視して荷を軽くする際に、テントを持って行かぬかつた
こと、大失敗の原因であつたと想われる。

4月27日(曇のち晴)7:45〜8:30——中食30分——瀧小屋11:00
天気亦晴れそつたので日を取く為、湯原から伊藤新道三ッ候
小屋に行くことにする。雨に降られる。12:00——第五登陸所
13:30

28日(晴)6:30発、新道旅行にでも来たか様女ロマンティッ
クな水俣川を湯原まで行く。中食——時間、千々の出合に20。
千丈沢は雪がべつたりとついている。双六小屋に今日中に入る
ことは不可能故、森林限界に荷を下げ、今夜は出合で一夜
を明すことにする。星空を眺めながらにして見るここので来る尾
根だけのある絶好の露营地を思われました。13:30——テガ池、

4・30―出合530

29日(曇のち晴) 6:00発―デボ地(145〜800)。アイゼンが良く効いた。稜線は予想外に雪が多かった。双六小屋18時着。

30日(雨)停滯。太郎から一パーテ入つて来た。雪が多くて太郎から二日を費やした。勿論ヒバークの用意はして来たが雨にた、かれるの女嫌つて今回は断念することにする。

5月1日(晴)相変らずこゝは風が強い。日も余ることだし眠前よく晴天停滯にする。

2日(晴)大々次を下る。昨年の冬に苦しんだこの次も今は一本の木も出ていない。中島ごん宅に泊めてもらった。6:35発―中尾12時。

3日(晴)このまま帰るのは暗いので米林と二人で中尾峠を越えて上高地に行く。ずつと雪はついて来た。

(平田 彰)

大峰・中ノ川

期 向 4月29日〜5月3日

メンバー 山本 田端 他一名

4月29日(曇)

9:10五茶(バス)12:15旭橋 14:05追部^セ部落の長老^{ユバ}尾場氏を訪ねて谷の状況をきく。13:00空身で旭ノ川上流カシノ本淵あたりまで偵察したが水量多く、その上左岸の道路工事の爲通行不可能 16:30追部部落対岸の地蔵小屋にて露宿。

4月30日(曇)

6:50出発、9:50矢筈峠 11:05モテケ小屋 13:00昼食後中ノ川を下流へ向う。足袋にわらぢばきの徒渉は快適だ。

13:30牛鬼滝、右岸又30米あまり高差する途中山本鹿の角を拾つて大いに悦に入る。

14:40紐架の滝、右岸の壁にあるバンドに上りそのきれた所から懸垂下降。15:45地獄滝左岸の踏跡を下りる。16:05出合の清着、30米ぐらいの滝で旭ノ川本流におちている。対岸も30から40米ぐらいの壁で、谷はせましく樹木がおおいかぶさつていて陰うつな感じだ。16:15来た道を引き返す。17:30モシケ小屋

5月1日(曇)

8:00出発 右岸の小径を中ノ川下辻山道へ迷いこむ。昼食後引きかえして西へ谷へ下りる。このあたりは下流のように大滝こそない水至る所に下口があり亦小さい滝の連続で、岩登

りもせねばならず容易に進めない。3時になつても屋根にとりつく道が見付からなかつたので黒ナメハ丁の手前から右手の槍ノ尾めがけて強引にやぶをぎぎ始めた。一時両半あまりで強線につく。1710槍ノ尾三角島の約1000坪方の鞍部にある畑企業伐採小屋につく。今夜はこの宿をもちのり車にした。

5月2日 (雨後曇)

8:00 出発、9:30 七面山頂 11:30 ~ 12:30 湯枝宿 16:05 秋迎岳

1710 前懸 (キャンプ)

5月3日 (曇時々晴)

8:00 出発、9:30 牛抱峠、11:00 前懸口 (バス) 6:30 近鉄大和

上市駅

(田端)

中央アルプス

期 間 5月1日 ~ 5月4日

メンバー 大島 広瀬 村井 三宅 佐藤 空中西 片山

他 一名

5月1日 (晴) 10:00 上松駅発。12:13 敬神の滝。小屋あり。13:00 出発。14:30 四合目。15:45 五合目。金懸小屋着。淡く霞んだ御

岳がどっしりと振をふるしている。キリマンジャロのようだ。5月2日 (高曇) 8:15 出発。8:30 駒つきハ丁。名称目どのこははない。9:50 天の岩戸、七合目。この附近から雪あり。11:05 八合目。13:20 玉の滝。14:40 雪田小屋着。小屋の中には雪が充滿していた。

5月3日 (晴) 6:20 出発。6:33 宝剣岳頂。10:00 槍尾の頭。霧のように甘美な緑の沢がいくつもある。14:45 殿越小屋。16:45 空木岳頂。17:15 空木小屋着。この小屋は沢の下部にある。ひどい小屋だ。中は雪が一杯。寝袋敷いて寝た。

5月4日 (雨後晴) 10:00 前をひいて出発。11:30 迷尾根、雨止む信大演習谷があった。14:45 功百着。バスで赤穂へ。全般的にスケールが小さく、激しいアルパイトを登らねばならない。アイゼン付邊に使わずにすんだ。比較的に行けるが、グツグツと来るものがない

(佐藤)

鈴鹿山行

期 間 五月一日 ~ 四日

メンバー 木村 大工原 錦田 比希 北橋 中村 保田

星野

5月1日(くもり)

8・27 湊町路 10・30 四日市に着く。四日市より湯山行電車↓

湯山、ミニバスにのり13・00 奥湯山、13・00 奥湯山路 15・00

デント池

5月2日(雨後曇後晴)

6・00 起床、雨の海停滞、10・00 天気回復 11・00 出発 12・10

昼食、13・20 御獄神社 15・00 武平峠 16・20 デント池

5月3日(曇後晴後雨)

6・30 出発 コリイ谷を通り 8・40 根の平峠、7・30 羽鳥峯

12・00 沢田岳 13・30 八咫峠、14・00 下の河原にて幕営

5月4日(小雨後曇)

7・00 出発、8・20 田代橋 8・40 トラックをつかまえ、9・00

田代橋 9・40 バスにのり、11・15 四日市 (木村)

立山一ノ越 前穂高岳

期間 7月28日〜30日4日

メンバー 平田、平野、村井、谷澄、錦田、酒井、中村

7月28日(曇風烈しく谷橋が凍ってからも天気よくすついでい

る。今後は雨とか短らまづ知りぬので出発する。五色で天候の回復

を待つことにする。全隊体が疲まつてしまつて行くに苦しまつた

浄上に立つて天を眺め、これからは行く山々がすつと続いている

・雪鳥井、30―雪壁(12・20)―(10)―(1)―越20

―守上3・20―ガラ峠5・40―五色6・10

29日(曇のち晴)体の調子が回復していいのと、メムバーが

三人減つていゝ荷が重いのとで相当時間を食つた。故中沢で飯

を食つてのんびりと休む。五色8・10―スコ16・15。二日の

木の悪いにはまいた。

30日(晴)始めの薬師を見て以来何時も登りたかと思つていた

が、夏の薬師には期待を裏切られた。太郎平はロマンティック

で良し所だ。可憐な花や草を踏みつけねばならぬのが残念だ

つて。スコア30―光薬師(10・30)―(120)―太郎14・45

31日(曇・ガス)途中道がわからず時間を食つた。太郎7・00

―昼食―時間―黒部五郎を少し下りた処の沢でデントを

張る。良い処だ。3・25。

30日(雨のち曇)食糧は充分あるし、雨の中を歩いていて

も何も見えないう面白くないので停滞。

2日(曇・ガス) ガスの切れ間に雲の平水見えた。途中進入
行くといふ人が並ぶ方向にやつて来た。双六の池迄一筋に灯く
出巻7・30—五郎小屋跡8・30—三ツ保頂上(10・30)11・00

—双六13・00

3日(晴後曇) スレぶりで晴れた。槍の上で通つて来た山々は
一望のもとに開けた。グレットは少女殿所である。双六の池
6・00—中食(9・00)9・30—槍(10・00—11・00)—
昼食半時間—北麓17・00

4日(晴) 昨夜右のゴロくしを処を履たので体のあちこちが
痛い。之すかにこの辺は人多い。新穂自宿してカチマノノ瘧
ぬした。兼師を思い、太郎を思い、回想しつゝの下山は楽しい。
北麓6・45—中食40分—奥穂10・30—前穂11・45—上野
池16・30(平田)

飯一志云の平一白馬帽子一白馬

期間 7月27日〜8月10日

メンバー 田村、笠松、玉井、田井、打出、長谷川、吉本、

7月28日(雨後曇) 合宿を終え奥谷温泉で待機して来た我々の

出巻は悲観的であつた。数日來の雨果こそよむなへ、台風の元
接近してつゝある。皆風邪気味でかぶり動揺している。前日は発
熱、丸窓は父兄黨の電報で下山した。道分と天狗に預けられ
既に津田彦治に集結したので明日ここをとりあえず一之越まで
出ようとなつた。夕方立山本丸見事な雪雲をかぶつて見せた。

7月29日(晴) 8・30発、兼師を少々買入れる。前次下山
11・05一之越、壺の標に晴れ上る。皆の動揺は二三ヶ所に進め
進めとはやりてつてはかまもなく十箇近い重荷に備へ初め、左足
では全く腰を抜かした。17・00着

7月30日(快晴) 6・40発、兼師の巨大な山鬼、遙か及雪平
にひかれつつ13・00又コ東越、頼みのスゴには赤濁した池しか
勾かっこので小屋の主人に天水を分けてもらう。ここを千住か
らスコに至るボツカルトのあることを知り、これにヒントを
得た玉井以下秋の偵察が後に上藤下横断の補助となつた。二ピ
ツ千住の雪田は絶好の露營地を張つていた。16・00着、

7月31日(小雨後晴) 7・00発、10・20発雨の中、荒れ果てた
兼師の河にもうた。垣々たる下り、太陽がさし、霧の裂け目
に覆われた兼師沢周辺の山々の雄大と曲線に目を驚かした。
絵巻叙の神祕實な姿をしか知りぬ我々は、このようなおおむか

又山谷に這まる意いせしむるさある。太郎矢野手前の森林の木をくむ。13.30 太郎小屋、上岳寄りの匪塚から中候に下る。河原の不雨跡を踏跡に殊らす。16.30 右俣出合の砂州上ニキヤムア

8月1日(晴) 11.00 巻、左岸の段丘谷いに源流との出合へ。

調査の調査班の天幕に出合ふ。最初の家では源流を通行する痕りであったがルート分らず取止め、機林に囲まれた芝生とお花畑のカベツケ原で16.15キヤムア。

8月2日(晴) 8.30 出発、出合の左岸寄りに進んで徒歩した。(?) 水は膝まで。雪平への取付きは出合の正面、注意しぬいと見通す様々二つ小さい溜沢、一ピッチで複雑な切通しに入る。森林中の急坂二時間、急に明るく芝生に出た(11.30) 小井及樋松と此塘は奥の日本庭園らしい。皆芝生をころげ廻って暮二心だ。爺道下でキヤムア 15.30

8月3日(晴) 予定の晴天停滯の日である。田井、打出、長谷川は高天原へ。田村は源流を下り祖母谷をブツシニにひつ橋がれながら湖行。玉井、吉本はコバイケ草の群落の中をぼつぼつと廻り、笠松はテントで指湯の水機を一日中いじくっていた。

8月4日(晴) 7.20 巻、縦走の後半に入る。16.30 爺帽子小

屋、鷹鳥帽子の下で寝る。赤菊しを池、糞尿臭い芝生。一年は明日ブナ立を下る。彼等のハシマヤ様には較べて二年は減入りなりと気が持てであった。

8月5日(晴) 7.30、荷を整理し一年に託して徹底的に軽くした。前次から直降針之木へ出て一日かせぐことも考えられたが先走するにせよ。8.30 前次、10.30 不動、低い山は蒸暑く、小さく登り降りし連綿に水もろく消耗した。然し、

低山世の花畑と針之木前回の水リニームは正例的で、小さな船室小屋の歓迎は一杯の水であったが夫に嬉しかった。16.35 着。8月6日(晴) ガス 7.30 巻、12.30 蓮華、13.00 針之木小屋の心れた登山者一人、針之木小屋の人を手にすらしらした。自分も山の趣人と妄想してろく荷持もななく、氷に盛で出かけたという。頼まれて女だめていろうちに時向ふに予定の新越谷望むべくもなく、スバリ向のヨルに泊る。15.40 着。一晩中

黒部から工事場の響きがした。

8月7日(晴) 7.00 巻、10.16 新越、13.30 蓮池、19.15 冷ひれもす立山知と再会を暇ひしんだ。水筒をケつて用意したにも拘らず木に濡れ岩小屋派手前、信州側の小雪田で火を起して水を作る。16.40 釣尾根三千米に近いです二のみさきと蓮池

へあし。

8月3日(晴) 10・10巻・11・10切芦小屋、14・40五巻、17 00
五巻小屋、×レットは増産でもないか、五巻附近の悪路は殺劣
の色濃く我々に因り酷であった。五巻小屋横へはつたきり、
ズルズルと露苔してしまつた。五龍東面に大きな▽状の雪渓が
あるが道から遠く利用する人は少い。

8月9日(晴) 7・30巻・9・50唐松、17・50キヤマム。

親しい山仲間と約りて毎日曇つてさかしているせいかな、この
頃よく悪路が起る。尔、これも今日で最後だ。不帰は大変な人
に三。つすきなない我々を振り返つては、名譽あるスホンの大
穴を笑つ。天狗を登り切るといままこの稜(亦)度に出た。稜
壁とした足取りで村宮小屋裏にたどりつく。取つてもさきの御馳
走で成功を祝つた。

8月10日(曇) 12・20巻・13・40猿倉、御来迎を迎えるキヤン
プ群の大獲きにたたまえられ、白馬の主峰は又の曰と、大雪渓
の群衆を蹴散らさんばかりに猿倉へかけおりた。与兵衛成徳の
銀×シと青茶に藤生の恵いをする。(田井、田村)

針の木岳—白馬岳—朝日岳

期尚 8月4日—8月9日

×ンバー 野田、佐藤、三宅、森田、西道、金子

8月4日(曇後晴) 7・05大町登入バスV 7・50 願沢合巻。
9・00 出巻。13・35 14・50 針の木峠。15・45 針の木ピーク。
16・24 針の木。スバリのコル。泊。信州側の雪渓は僅かに水
が流れてくる。

8月5日(晴) 6・30巻。6・45 スバリ頂。8・12 赤沢頂。

9・30 橋沢頂。9・40 新越稜越。10・25 巻。11・10 岩小屋沢頂

12・05 12・30 浅雪。12・50 種池。15・16 冷池。17・18 鹿島南

峰。18・00 折尾根、泊。信州側の雪渓から水をつくる。

8月6日(晴) 8・05 巻。北麓ピークを登り、9・15 ×レット

13・30 五巻頂。18・08 唐松小屋前。18・30 泊。黒部側の雪渓に

水が豊富にある。

8月7日(晴) 8・20 巻。8・33 唐松頂。13・58 白馬鐘頂。

15・00 白馬。泊る。水の心配なし。

8月8日(晴) 7・30 巻。8・10 白馬頂。8・40 三回巻。10・08

雪倉頂。10・50 12・15 長川屋敷。14・25 朝日頂。15・20 朝日

小屋。この日以後水の心配なし。

8月9日(晴) 6・35 巻。9・20 11・00 北又谷で昼食。11・35 巻

運味。13・38小川温泉着。↓泊駅。連日。頭上は晴れていたが
信州側は蒸着い雲が垂れこめられた。白馬迄は水に苦付した。

雪雲此の世は殆んどない。新田原池には水はぬるい。へ余りかイ
ドマンクをみてはしぬいことだ。種池は汚い。種池手前の幾箇
にはぎれけい水が流れこいた。また、立巻小屋裏の雪雲にも少
し水があった。や此の水はその氣にぬれば飲めるだろう。後五
は黒部側に續く信州側に築い。道は主に黒部側をまいている。
進むにつれて夜靉する程の姿が美しい。白馬から北は全帯に緩
く斜面が曲折し牧場的でロマンチックだ。雪雲も多く水の心配
はない。高山植物も咲き乱れている。人間にも殆んど会わない。
北進するにつれて美等は更なる春へゆく。例えは、杓子附近小
の雪雲は次第に数と大きさを増す。針の木を眺むはれこいたコ
バイケインウもや池附近かを花をつけ初め、朝白岳では白く積
雪に咲き揃う。(佐藤)

北岳一問ノ岳一農鳥岳

期間 8月4日〜8月7日

メンバー 大崎、佐藤

8月5日(晴多雲)7・35日野鳥路へバス 8・00白徳路、

8・20竹幸路へトラック 9・50駒か岳神社終、13・50笹ノ平終、

15・15三恵湖終、(ハ・一ハ七三)、15・50刀利天料、16・40五合目小屋

着。駒か岳神社から3時間間の往、平に水櫃の遺蹟が水場あり、

8月6日(雨多雨)6・30出発、晴れたのち出発する。7・45で大

小屋、10・00駒か岳頂上、ガスの高標架を祀す、トラックと北岳

水見えに駆け、11・15出発、11・50六名、12・25駒津峠、13・30

仙水峠、小雨が降り出す。14・15出発、15・30常火山、16・55アサヨ

峰、拍發らす時水路り踏向も進くはつたので、換二しえをす

る。

17・40出発、20・10早川尾根小屋着。駒とよる右の向及びアサヨと

早川尾根小屋の向に水櫃水あるらしい水見せらす。

8月7日(晴)8・40出発、9・00之河原峠、10・50之河原小屋、

峠からの下り道はとても悪い。夜叉神峠より弘河原へ道を作つ

ているのよ水が峠ニの上高地に落ちたろう。いい河原である。

12・05出発、14・35白根御池小屋着。眼前に北岳が聳え、左には風

小見える。池あり林あり、ロマンチックなら詩も生れよう。

8月8日(晴)4・00出発、6・00小太郎尾根、バットレスがよぐ

見える。7・18北岳頂上、仙丈、駒、富士を冠はじめ、北ア、中ア

も見える。8:00出発。10:15南ノ岳、ガスがかなり出す。確かに迷いやすい処である。先行の人は誰か先に行くのを待つている。11:15濃島小屋、尾根小屋今年新設、12:00出発。12:45西濃島岳、13:20東濃島岳、14:00大門沢新道入口、17:15大門沢小屋着。
 8月9日(晴) 4:45出発。8:10奈良田、9:40出発(ハマス) 12:23身延篇、12:38出発富士經由ス帰阪
 南アルプスを知る為、最もポピュラーな道をえらんだ。水は2Lのポリタンク一つあれば充分である。スケールの真では北アルプスほどの比ではない。マウンテンガイドブックシリーズはなかなか参考になる。(玄瀬)

登山師沢がら雲云の平

×ムバー 米林他一名
 期間 8月11日→8月18日
 8月11日 20:09大坂発
 8月12日(雲後雨) 9:40猪谷——11:30有峯(山越氏宅を昼食)——12:40有峯発——15:40小畑尾峠(真川峠)——16:00真川途
 真川峠より豪雨となり全身、テントすぶぬれになる。

8月13日(小雨) 4:00起床——6:55出発——8:30森林限界——10:15昼食——11:20太郎茶館平
 天候悪化の為午後以降停滞

8月14日(ガス・小雨) 4:00起床——7:00出発——11:40登山師沢 黒部川出合

8月15日(曇時々雨) 6:30起床——8:30取付のルート偵察——11:00左岸の荷渡歩——12:30出発——2:30雲か平木端——15:30 ×マンアサイト

8月16日(ガス後晴) 6:00起床——8:00出発——11:00ワリモ乗越——12:10赤岳——15:00野口五郎——17:35馬場子
 面白いコースを選んだつもりだが、雨ばかりでさっぱりであった。黒部川の思わぬ増水のため非常に危険を目にであった。即ち黒部は登山師沢出合のところで直ぐに渡ればよいものを玄太郎の小屋の親爺に少し下流だと聞いたものだから小雨の中をすつと下流を下り、合流した他のパーティの一名と計三名を渡渉のせめ渡渉して対岸のルートを調べていたところ急に増水してしまいい、帰れなくなってしまった。しかも早く兩岸に分れて渡ればあの附近はひどいブッシュでテントを張るところ水はぐく屋根だけ残った小屋に泊った。

雲の平は静かです持てかっした天候が昏しくぬかつた。雲の
平から烏帽子に行く日から天候は回復した。秋念奴が下山
した。どうも八月十日〜二十日の間の天候は昏しくない様だ。
(米林)

薬師岳・金作台 (春山の三めの偵察行)

メンバー 山本信樹 田端剛爾

期 日 58年8月11日〜19日

11日(晴時々曇) 20:10大沢発

12日(晴後時々雨) 9:15追分発 12:05宝壁 14:25〜15:20尾大

小屋、18:10五色小屋近くにキャンプ。

13日(曇後雨) 8:30出発、11:10越中沢岳、15:00〜17:05スゴ小

屋、17:20小屋の少し上の所でキャンプ。

14日(雨) 9:15出発、13:10北薬師、14:30稜線より10分あまり

金作谷を下りてキャンプ

15日(雨) 停滞。

16日(晴) 四日向降り続いた雨もやっとあつた。初めて父
の薬師の全貌だ。キャンプサイトはちやうど金作谷のカールの

中だつた。9:15出発、テントのすぐ下で谷は小さく落ち込ん
りきれから十分程は大きな岩はかりの広い平な床だ。所々に
木が流れている。まもなく密生した榎松にぶつかった。ここで
谷は大きく落ちこんでいる。ゆるか下に金作谷の雪渓がわずか
に右にまわりながら横たわっている。榎松の隙間にある急な沢
いかに50分下ると最後に小さい池があつたその下から出合危
されいな雪渓がつづいている。そのちやうど中間で北薬師から
出ているかなり大きい沢が入っている。赤茶化し急な沢で池が
二つ見える。11:30出合到着。案外明るく感じで本流は出合のす
ぐ上下で約20米程の壁になつていながら簡単に河原に下りる事だ
でさた。

12:30本流を上流へ向つて出発、左岸を1時間高まきして河原
に下る。川はすぐ河口になつていて少し左へまわっている。10
分あまり左岸をへつり浅瀬を又つて徒渉、このあたりから谷
は少し明けてくる。更に20分右岸をへつると谷はかなり明るく
なり薬師側からV字型の沢が入ってくる。赤牛側の尾根もゆる
やかとなる。15:00赤牛沢の少し手前で引返す。16:00金作谷
19:20キャンプ

17日(晴) 晴たり曇り(曇り) 7:40出発、9:30出合下流へ向う。出

合のすぐ上で右岸へ徒歩、すぐ中州へ、次に右岸へ、いずれも
 膝より少し上程度の徒渉である。右岸を20分へつり、谷が左へ
 まわつて湾になつてゐる所を約20米上の岩棚へ登る。そこを30
 分下ると谷が大きな谷状に曲つてゐる。このあたりは水量も
 多く兩岸はほとんど陰つた感じだ。赤牛側には沢は多く、溪師
 側の沢は全て涸となつて本流に落ちてゐる。ここから一階間大
 きく高まざる。やがて正面に三百米はあつた隙に岩壁が又よ
 てきた。上ノ黒じんがたろつ。1300mの接線まで引返す。
 1300mの気の中を感ぜた。女んの気だしに足をおいた草むら
 實はその下に水が流れてゐた。あつたといふまにスリッパしてし
 ばつた。1410mで導かれながら、と振き始めた。1630金
 作出令。1940ギャン、苦しい6階向だった。

18日(晴時々曇) 8:30出発。9:30築駒岳、12:00大郎小屋、16:15
 折立(ジーン) 18:50小見
 19日(晴) 3:00大坂着。(田端記)

屋久島、宮ノ浦岳

期向 8月22日〜8月28日

メンバー 大工原、他二名

8月16日(晴) 鹿兒島着。那待ち滞泊4日。

8月21日(晴) 鹿兒島発

8月22日(晴) 安良港着。トロに取せておけることになり、
 13:20トロ終兵。途中昼食し、17:25花ノ江河小屋(無人)着。石
 巻りの良い小屋である。

8月23日(晴後雨) 9:00小屋発。10:15宮ノ浦岳頂上着。この頃
 から次第にガスが上つて来た。10:45頂上出発。11:50小屋着。小
 屋で昼食中つたが、女弟にはげしくなり、14時頃から
 豪雨となつた。この雨の中を、島の人達から人程上つて来て、
 台風十七号接近の知らせをうけた。どうせ下つても船はなりの
 小屋に沈没するに上する。

8月24日(雨後曇) 雨は、はげしく小止みになることもない。
 しかし14時頃から次第に小降りになつてきたので、パッキング
 を始める。14:20花ノ江河小屋発。18:05小杉谷着。小杉谷は管絃
 書の人達も住んでゐる所で、小学校の分校もある。二二に泊め
 ておろす。

8月25日(快晴) 8:30小杉谷出発。途中からトロに便所をせま
 らうい、12:00安良港。船は久龍女で、小学校の臨時宿直員に

してもらう。すく昔い夜だった。

8月26日(晴) 11:00安房港出港。

8月27日(晴) 4:30鹿尾崎港着。

屋久島には、千米以上の山が36種もあり、曰教本あればあちこち行ける。岩場も大きなものも永田岳にあるが、記録はあまじない様である。七、船の便が悪く、下手をすると四日も待たねばならぬこと。一ヶ月の内35日は雨だと言われる程雨の多いことなど都合の悪いことが多い。水は頂上附近まで湧いており、水筒の必要もない程である。キャンプサイトは、安房から登れば、花ノ江河附近にしかない。冬は11月程の積雪があることである。(大工原)

中央アルプス

期 前 9月1日〜3日

メンバー 五百蔵 他一名

9月1日(小雨)

上松路08:35 敬神の港11:00 — 四合目(昼食) 13:20 — 五

合目金懸小屋(泊) 14:30

前夜からの雨のため、予定を変更して五合目で泊る。

9月2日(午前中晴、午後ガス)

五合目着07:15 — 玉壁の小屋10:40 — 本岳頂上(昼食) 11:25

— 本岳路12:15 — 宝剣岳13:03 — 松尾岳(泊) 16:10

合目に避難小屋、前岳と駒本岳の間に玉壁の小屋が新しく建てた。各山小屋は肉鐵の準備中。縦走路は宝剣の下り本一部がよつと注意がいりぐらいで、丸んの変換も短い山道。松尾岳頂上から東へ50米ばかり下った所に避難小屋ができていた。教人建屋の収容力で、本は北へ50米ほど下った所におこ。この日宿をこへ泊った。

9月3日(晴)

小屋路08:30 — 善ノ谷12:50 — (14:00発バス) — 赤穂駅14:30
予定はこの日に空木岳から下る筈だったが、同行者の都合で下山日を遅延すわけにはゆかなかったため、松尾の尾根を下るあまり登山者の通らぬ道だが、避難小屋建設のためのホツカ木この道から行われたいしく、かなりよく踏まれていた。記録にはないが、笠置所の取入口については、11:30頃であったと思う。この日まで未だは入里である。

(五百蔵)

雪彦山

期間 9月1日〜9月4日

メンバー 打出、前沢、服部

距離市の北20キロにある雪彦は高感ある場所をまつている。

9月1日(水)

三善のバス列車姫10着。姫路は20登山、内行神彦バス、雪彦のバスが出ているが時間都合で乗れなかった。130山内、雪彦の小もとの夜取部迄を通り木崎道を通って行く。夕ヶ峯小屋があった。泊。230。

9月2日(晴) 也哉岳東山ルート 高度差250M

630起、715出発。小屋は少し高い位置にあり取付奥まで下り下る。取付奥930このルート下半は傾斜60位のヌラブでこれを50。7時半までのぼる。1050〜1120昼食。この後オーバーハングを少し登いて馬の背と呼ばれるリッジへ出る。これを400ヤリで降り切り頂上へ出る。(1150) 3時小屋帰着。

9月3日(晴のち曇) 三善正面ルート 高度差200M

小屋で荷物整理。パッキングして出発(7:30) 不行沢出発(8:30)

ここで荷物をテ泊する。不行沢からすこし入った所を取付奥とある。下部20m程はオーバーハングした岩でピトン多数打つてお三本相当でザイルの滑りも悪いのと相まってくたびれだ。

その後ピッチ、ブッシュを越ゆるコンテニアスの後下まで10mくらい切れ毛中央壁上部のテラスへ出る。この上ピッチのオーバーハングはトキトキとせられる。これゆするピッチ

で降でコンテニアスを続け頂上へ出た。200。帰途裏剣のルンバを懸垂又懸垂で不行沢山合点取った。山合点テントを張った。

9月4日(晴)

不行沢山壁は陰惨で手強そうなのであきらめ、撤収する。

9:50 雪彦発のバスで下る。(前沢)

滝沢丘西尾根偵察

期間 9月21日〜9月23日

メンバー 野田、六戸、他三名

9月21日(晴) 5:50高山落へバス平湯至由。9:55新藤崎温泉11:30押谷山合附近(ハスケッチ)。造谷山合往復の後15:45白出沢

出合(キマンア)

9月22日(小雨後曇)午後済次岳西尾根の取付地へ偵察

9月23日 8.10キマンア撤収、10.10新穂高温泉

石俣が附けるミジマンタルへ飛降り尾根小坂を登ちて姿なすこまじく仰がれる。西尾根の側面は相当に急傾斜で、全体にブッシュも深い。結局本端から取付くのが白沢の雪崩をも考慮した結果一番望ましいとの結論を得た。悪天候のため、予定した路線からの偵察はあきらめざる。当初中崎尾根からの偵察も考えなが、地図にある道は完全に廢道と白って不可能とのことである。新穂高から一時向程上の所にある飯場をBCにするにしようし、不十分ながら偵察行を終った。(野田)

有峰—三ノ俣—赤牛岳 (春のための偵察行II)

期 向 10月6日〜10月12日

メンバー 乾、大島、村井、谷倉、丸尾

10月6日(小雨) 6.40猪谷着、13.30有峰。上までガソリン軌道よりトロッコに便乗。民家の都合で飯場に泊る。

10月7日(曇後雨) 6.50出発、10.40真川峠、15.30太郎小屋、小

屋番不在。

10月8日 5.20出発、12.00黒部東越、19.20三休運華小屋

10月9日 12.00出発、15.30水船小屋跡着

10月10日 6.30出発、7.00悪岳、9.30赤牛

大島、谷倉—赤牛岳北西尾根P3より派生する尾根を下る。乾、村井—P3をキマンア手前まで下り、カスミ平の池を攻つけ、春に付きこまぐ下れることを確認。(丸尾、デントギーパー)

12.00赤牛ピーク、17.00テントに帰る。

10月11日 10.00出発、12.00三休運華小屋、15.00赤沢出合、19.00

取入口(小宮山氏宅に泊る)

10月12日 8.00出発、13.00峠、15.00大町 (村井)

スゴ沢より上廊下偵察 (春のための偵察行III)

期 向 10月8日〜10月11日

メンバー 笠松、田井、大工辰、玉井、保母

10月8日(曇) 千寿ヶ原8.30軌道下り7.40(朝食)―北越取入口小屋11.40―工事場(13.00(昼食)13.45)―スゴ谷右俣出合

渡渉(14:00) - (14:40) - 尾根平坦となる(1900m) (17:00) - スゴ小屋2:10

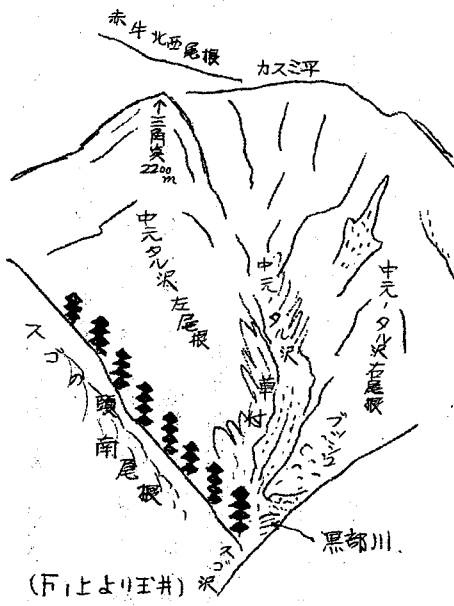
10月7日(晴) スゴ小屋(14:30) - スゴ乗越(15:00) - スゴ沢F2上(17:10) テント設置

10月10日(晴) F2テント(07:00) - F2下(08:35) ↓ F1上(09:20) (09:40) - F2下(10:15) - F2上テント(11:00) (11:30) - スゴ乗越(13:40) - スゴ小屋(14:45)

10月11日(曇のち雨) 小屋(07:00) - 平坦な尾根(08:00) - スゴ谷右俣出合(苔小舎あり) (09:00) (11:00) - 北麓小屋(12:35) 笠松、田井は下山、他は立山温泉に行く。温泉は無人。12日ケーブルと軌道で千尋ヶ原へ

短い休みにも上麓下搜索を試みる為、立山の砂防軌道と余り知られていないスゴ小屋ホツカルートを利用した、へこのホツカルートは夏縦走の折、スゴ小屋で開いたものこのルートは五十島氏に問合せた。しかし、予想外に時尚を喰い、暗闇の中をよつこの事でスゴ小屋にまどり着いた。その為次の日に渡渉し出終が遅れスゴ沢F2の上でテントを張らざるを得なかった。これは狭い河原のテント地でもちよつと雨がふれば木が湿しにぬるつ10日F2を左岸で大きな高巻し、F2よりかなり下流へ灰色の崩土

にうせて下った。(F2は本流と教本の支流により出来ている) ここでスゴ沢は小さいト口になつたのでザイルで左岸をへつり次いで右岸を下つてF1上の広い河原に着いた。F1は真直ぐに20メートルの落ち居り兩岸は赤いスラブ、右岸亦下れそつてあつたが、時尚切れと悪い天気予報の為これ以上の下降を断念した。F1上からは黒部本流も僅かに望まれ、地固ではスゴ沢出合より約300m下流にゆくさの中元のタル沢がスゴ沢出合の真正面に流れを改め、タル沢左岸は出合までゆるいブツツニがつつさ右岸は草村と名つていた。この中元タル沢兩岸を形成する左右両尾根



は共に赤生山池から黒部へ急傾斜を落ち、大槓木の發生した尾根である。スノの頭から山谷に向つて降りてゐる尾根は本端まで針葉樹が生えている。この結果、北西尾根→カスミ平→中元タル沢→尾根→スゴ沢出合→スゴの頭→スゴボツカ尾根のルートで積雪期の横断が可能であらうと思われ。 (果際は北西尾根→中元タル沢→尾根→水俣) (五井)

燕岳——北穂高岳

期 向 10月8日—13日

メンバー 服部、前次、打出

コース及タイム

10月9日(晴)有明7:30 中彦8:45—燕山荘12:50—燕岳往復—就床6:30

10月10日(晴)燕山荘発7:00—大天井9:00—水俣東邊—

12:10—青の小屋2:00—槍の穂往復。

10月11日(曇)青の小屋発7:00—キレット底部9:00—北穂

高11:00—溜沢1:00—燕沢園3:30

10月12日(晴)上高池発1:30(バス)

試験林みさもあり、のんびりした山行を樂しみたいので、小登泊リとし、サマザックといふ盛装で行った。

熱の登りは燕山荘泊りという気安さから、紅葉を樂しめながらゆるゆると歩いた。気遣われた天気が好転して、山は8日に降った雪と紅葉の化粧で、何とも云えぬ程、美しい景持ちであつた。

東鎌で汗をかいた後、槍の穂に登ると、折からのガスに、御來迎も見えた。青の小屋の夕暮は露土、ハッ、雨ア等々雲海の上に首を突き出し、浅阿山は、さながら大海原を走る汽船であつた。

少し曇つた空を気にしぬながらもキレットを越えた。新雪はまだ溶く、大したことはない。溜沢の紅葉は今を盛りと筆を競い人の顔までも黄色く見えた。(打出)

木曾駒ヶ岳

期 向 10月9日—10月10日

メンバー 栗木、西垣

10月9日(晴)上松駅着9:32—出発10:00 12:00飯油焼、昼食、

15.00金懸小屋、泊。

10月10日(晴) 7.30出発 10.30五壁小屋、荷を置いて、11.20頂上、笠懸、伊那那岳往復、15.00五壁小屋、泊。五壁小屋は新緑のトタン表、溜置きの水釜みつけたので、ここ泊る。夜ふけトタンが不気味に鳴る。

10月11日(晴) 頂上後戻、10.00小屋発、13.00歇神滝、あけび獲し、二三個しか見つからず、15.30寢覚めの床、17.30上松懸階段。試験後の骨休めとアルプス全体の展望を目的としてのんびりした山行を志した。幸い天気にもぐまれ、夏の合宿の時のように、夢中を歩いただけという山行とは、また別の気分が十分味わえた。(西橋)

薬師——槍が丘

期 向 10月9日〜10月17日

メンバー 広瀬

10月10日(晴) 5.30富士巻、5.50発、7.00千寿が原着、8.15発
ハトロッコV、9.20豊谷着、10.30取入口(廣川とスゴ谷の合流
点)、12.00岩小屋(スゴ谷のゴの字の所)、2.30下山する田井

大工塚君と處ナ 3.40出発、8.00スゴ小屋、ホッカ道亦意外に長いのに驚いた。スゴ小屋からは富士山の灯台とこまよく見える。小屋には笠懸、玉井、塚母がいた。

10月11日(晴後曇) 7.05三人をばり出して出発、11.25北薬師岳太郎小屋本付つきり見える。梶原さわめが良好、槍懸には雪がつかっている。11.40出発、12.50薬師岳頂上発、2.50太郎兵衛平小屋。

10月12日(雨後曇) 停滞。

10月13日(曇後雨) 5.30出発、7.20上ノ岳、ガスがのりすくく視界殆んど0。11.00黒部五郎頂上、12.20黒部五郎小屋跡、2.10双への別れ道、3.30三俣小屋。朝天気回復に向いていたので出発したか、上ノ岳を過ぎる頃より、ガスがかなりはじめ、踏み跡が唯一の目よりであった。夕方雨の中を槍懸等が野口五郎より来る。全く奇蹟。

10月14日(曇後強風雨) 8.30出発、10.15双六小屋、小屋につくとすぐ強風雨になる。番入はいない、なかなか水炊道。

10月15日(曇後雨) 停滞。

10月16日(曇) 6.00出発、8.20千丈沢系越、9.25岩小屋、晴れる。霧先へ登るのは三度目であるが、いっ寒くても感じがいい。

11.15 出発、12.37 検沢小屋、2.00 横尾、3.00 徳次、3.53 明神館、
4.45 上高地。兼清さんの組とは、寺り出候す、すぐ最終バスに
乗って松本へ。

天候には恵まれなかったが、それだけに得る処が沢山あった。
(広瀬)

裏銀座縦走

期 向 10月11日〜10月16日

メンバー 金子、酒井、高橋

10月11日(晴) 8.10 濁小屋前の河原寮、5.00 烏帽子小屋、16.20

烏帽子ピーク

10月12日(みぞれ後曇) 僅かの積雪をぬって野口五郎へ、途中

何度もブロッケンのおぼけに合った。野口五郎は東面に新雪

かっけていた。

10月13日(曇後雨) 9.00 出発、17.00 三俣連立小屋。小屋で広瀬

さんと会った。

10月14日(雨) 8.30 出発、10.15 双六小屋、

10月15日(雨、風) 停泊。

10月16日(曇後雨) 3.00 起床、6.00 発、6.25 三沢岳、9.25 有

の小屋、11.15 発、13.00 二の俣、14.00 上高地バス停留所↓松
本。

徳高の新雪は前日未の雨であらうか消えていた。風と雨のあ
と洗われた様な紅葉の上高地が素晴らしく美しかった。
(高橋)

上高地

期 向 10月4日〜10月16日

メンバー 兼清

試験後のこの日の休むをを利用して紅葉の美しい上高地を見に行
った。3日向とも雨で秋晴の穂高連峰は望まれなかったが、雨
の降る上高地の景色も又良いものであった。(兼清)

濁沢岳西尾根偵察

期 向 10月3日〜11月6日

メンバー 兼清、平野、大島

10月31日 大阪巻6.9

11月1日(雪一雨) 9.00上高地巻——9.45明神——10.35

12.30徳天(中食)——13.30横尾——15.00横尾菅林舎小舎着

11月2日(曇) 11.00出巻——13.45酒沢小舎

11月3日(晴) 7.00出巻 9.30穂高小舎——10.45小舎巻——

酒沢西尾根上部偵察——12.00小舎着——12.40小舎巻——13.00奥

穂高岳——13.55小舎着

11月4日(快晴) 7.50小舎巻——10.00西尾根穂田富士手前10.20

——13.00小舎着——14.25小舎巻——15.00奥穂高岳——15.30小舎

着

11月5日(晴) 8.25小舎巻——8.40酒沢岳——13.10北穂高岳南

峰13.50——15.12酒沢小舎通過——16.45穂高小舎着——17.00穂高

小舎巻——18.30酒沢小舎着

11月6日(曇) 7.10酒沢小舎巻——8.30横尾——9.30穂沢——

10.10明神——10.55上高地着

冬山宿の目標に迷った酒沢西尾根の穂田富士より上の半分を偵察する目的で出巻した。前半穂高小舎に入るまでは兼持が調子が悪く時向を換った。西尾根はハエ松と岩のミックススレ。尾根でその上に10.530m程度上の方で50m程度登かっいて

いた。酒沢岳—北穂高岳の稜線は岩の上に氷が張っていて雪は冬よりもすべらない状態に悪かった。それで大島、平野の二人は峠路北穂高岳を降りられた。(兼持)

烏帽子への春山用荷上げ

期 向 11月1日〜11月4日

メンバー 野田、山本、木村、田村、佐藤(以上偵察隊)

木村、打出、保母、三宅、佐藤(一) 栗木、西垣、谷道(以上

送ヶ岳へ搬送)。本嶺、玉井、中村、北橋(以上燕へ) 餅田

春の上廊下横断計画では稜線上^{250m}の烏帽子山屋本Bとされた

ので相当量の食糧準備を歌に荷上げすることにし、春のBに入り

女非難に助け、(荷上げしたものは春山食糧及び準備の所を

参照)

11月1日(曇のち雨) 7.45巻8.00 湖小屋10.00荷上げの目的全

て11時の製造で上げることにして個人装備で湖小屋へ入った。

夕方から雨が降り始める。夕飯後荷分けをした。

11月2日(小雨高所のみ雪) 偵察隊は個人装備は20.5分後

の荷で出巻。雪は三角峠附近よりあった。偵察隊を小屋に残し

大急ぎで下る。濁小屋07.30↓取付き08.20↓三角尖12.00↓
高帽子小屋14.00↓濁小屋16.15

11月3日(雪) 笠ヲ岳へ縦走するものは個人装備の足がぬれ
は25kgを持つて出発、早く着いたので十人程は頂上へ行く。雪
深20〜30cm。縦走のものを残して夕膳の準備に急いだ。

濁小屋14.35↑高帽子小屋(13.00〜15.30)↑濁小屋17.40(縦隊
は4日濁小屋へ出発)

出発前は参加者は着がれ、余り元気が良く、早く体の不調の
者も出たかにもかかわらず400m以上を荷上げした。ケロシンの缶の漏れ
が目立ち春まで持つかどうか心配であった。(玉井)

高帽子——笠ヲ岳

期 尚 11月3日〜11月6日

メンバー 木村、三宅、打出、保田、谷垣、所恒、五百城、黒

木、佐藤(殺)

11月3日(雪)

6.30濁、小屋発、7.30濁の尾につく。10.10昼食、30分休憩の後

出発、11.20三角尖以後頂上には0.00高帽子小屋につきあがる。

11月4日(快晴)

0.00高帽子小屋発、7.30三ノ岳、10.00野口五郎、昼食を取り、
10.30山登、13.40水駒小屋跡、14.25霧沢の登り、15.30霧沢、16.20
三俣小屋下着く。

11月5日 快晴

6.40三俣小屋出発、三ッ俣↓双六峠は一面の雪であった。
8.50双六小屋宿。9.05双六小屋発、10.55昼食、11.50大岩東越。
14.30松ノ岳↓16.20笠の小屋宿。

11月6日(曇り後晴)

7.40笠ノ小屋発、8.00笠頂上↓10.15水場、12.35検見温泉
(木村)

濁——燕 岳

期 尚 11月4日〜11月5日

メンバー 丸瀬、玉井、中村、北島

11月4日(晴) 濁小屋08.20↓東沢08.50↓材木中継所(11.25
昼食12.30)↓東沢東越16.00↓熱頂上18.45↓燕山北冬期小

屋09.30

荷上げの爲フナツテモ、注意したのだから、疲弊しては居たが、好天に励まされて出発。中継所までは積雪であつたから、木材伐採の爲荒れ又助道も多く出来て、相度も迷つた。葉越を抜けた北嶺の峰を左精介持参夕暮の中を北嶺の登りにかかつて、森林帯を抜けると雪が20m位あり歩きにくい。ランプを出して、急斜面をジグザクに登り稜線に近づいた。登り切ると急に視界が開け、針ノ木から双六にかけての山々を深蒼色の夜空に映光っている。風が吹さぬじめ、ピッケルが手に粘り始め、ランプの光に次々に現われる奇岩に惑されつゝ、燕山荘に急ぐ。すつかり冷えて小屋に着きストーブをたいてほっとした。

11月5日(晴)燕山荘に20分中巻温泉に10分、有明川松本赤尾しいモルゲンロートだった。中つくり食事をとり出発。雪がすく無く滑り易い道を平歩めがけ下つた。夜、松本で一杯は寝しした。(五井)

秋の黒部上流下の横断偵察行

(春山のため)
(の偵察行IV)

(赤牛岳よりスコ沢へ)

メンバー 山本、野田、水林、田村、佐藤、

期 間 11月始めの荷上げ後11月3日より出発、荷上げの分は毎
日 際する。

11月3日(晴)起床5:00 | 出発(烏帽子小屋)7:30 | ミツ
音9:20 | 野口五郎岳11:40 | 昼食 | 12:25発 | 東沢東越
15:10 | 木道小屋16:40

11月4日(快晴)起床5:00 | 出発8:00 | 黒岳9:30 | 赤牛
岳15:15 | 赤牛岳尾根に足間コル16:00。

11月の稜線の雪は非常に不安定で行程はなかなか、凍沢東
越から赤岳、又黒岳附近には積雪樹には相当のフィックスル
必要で女3つ。

11月5日(快晴)起床5:30 | 出発8:30 | 13:00 | 森林帯
界15:15 | 昼食 | 出発13:30 | 三西岳、14:35 | キヤマア
カイト17:10

赤牛以下はしばらくがらくの尾根で、その後ロビロビアツ
シユでルートの変更が非常に困難を感じる。再ミルトを回さ
かえつてから標高二三〇。Mの三角尖に着いた。ここから下は尾
根が非常に急でしかも四方に小屋根を抜けてみて殆ど見通しは
つけない。いかにスコ沢の様子をマヤヒルートをとつたがこれ
が誤りで一時間余り下つても全く深いアツシユのため正確なル

トトがわからなかった。しかしヤヤにすれすきでいることがわかつたので、谷にトラバースして僅かなヤヤンサイトを覓付け露宿。

11月6日(晴後曇) 起床6:00 — 出発9:40 — スゴ沢合点11:30

徒歩昼食後出発14:00 — 下の巻14:25 — トラバース終了15:20

— 上の巻16:20 — 17:30 — 上流テント地20:00

昨日の誤りを知つて今日はヤヤ右の尾根にルートを選び尾根を下る。尾根は非常に急で、ブッシュはかなり少く、大きな木の木が生えている。唇頃出合着。黒部川がかなり減水しているが、川幅40m位横壁に徒歩する。スゴ沢下の巻、上の巻の東側に降向がかなり上の巻を越えるともう噴階になる。夜8時迄歩いて、かなり次の上部迄上つたがこの附近から天が川さく分れて危険であるのでテントを返すことにする。

11月7日(雪後雨) 起床6:00 — 出発9:15 — スゴの巻10:00

— スゴ小屋10:50 — 出発12:20 — 眞川支流出合14:40 — 取入

事務所16:00 — 干狩ヶ原19:00 — 露宿。

朝起きると思いがけぬ雪が降つたが出発することに決める。出発しなすべくスゴの巻に着いた。スゴ小屋からは雨の中を一气に下る。眞川の支流は素晴らしい巻を連続している。取入

口から干狩ヶ原迄約16キロを最終露宿に乗るため凶死に怪死としてぎりぎり向合った。(山林)

大阪山岳部は、関西学生山岳連盟の本年度当番隊になつた。山林、水林が岳連委員として活躍中で、松本が補佐している。山岳部は他の運動部とちがつて試合が乏しいので、山岳部相互間の結びつきがうすくなりがちであるが、これをひきしめてゆくことが当面の目的である。

また、当山岳部は、大阪大学体育会において野田が常任委員、佐藤が委員となつて、体育会に協力の姿勢を示している。

一九五八年年度

岩登りトレーニング記録

本年度もかなり充実したトレーニングが行われた。それだけ
の効果もあって様だ。また本年専ら、奥山のまえに強化トレ
ーニングを行ふことになった。次に概略を掲げるが、幾分有か
ら記録亦残されていぬ場合もあり、これらについて曰はす。
場所のみにとらぬ。

4月1日 蓬萊峽 大島、玉井、笠松、佐藤

4月13日 芦屋ロックガーデン 兼清、野田、三宅、大島、

笠松、田井、玉井、藤尾、黒田、前田、佐藤、大工

原、中村、OB玄橋、穴戸

4月20日 蓬萊峽 兼清、野田、平田、米林、田井、大工原、

笠松、三宅、黒田、藤尾、玉井、田村、五百藏、保

田、金子、錦田、西垣、北尾、高橋、酒井、長谷川

服部、丸尾、OB穴戸、玄橋、西川、この日から本年

度の新人達も頗るめじはじめた。

5月11日 芦屋ロックガーデン（軒茶屋）宮塚 山本、西

垣、五百藏、黒野、中村、黒木、北橋、佐藤（三）

打出、服部、保母

ロックガーデンキックスル、玄橋OB、佐藤

5月17、18日 新人歓迎キックスル（道場川原）酒井、北嘉、中

村、黒野、谷垣、服部、保母、前次、長沢、長谷川

西垣、打出、高橋、金子、五百藏、丸尾（三）丸尾登

佐藤、黒木、北橋、錦田 以上新人。兼清、山本、

野田、平田、米林、平野、田端、木村、田村、佐藤

大島、村井、老瀬、田井、森村、玉井、笠松、三宅

（OB山本の、玄橋、西川、

藤田先生）

5月21日 芦屋ロックガーデン 田村、佐藤、三宅、村井、大

工原、北橋、保母、中村、丸尾（三）、錦田、佐藤（三）

服部、打出、前次、（笠松、田井は能勢ロック）

5月26日 蓬萊峽（確保の練習を行つた）

6月15日 御影（六甲嶺上）奥地（芦屋川）系心トレーニング

一、二年部員は各々30kgの荷をかついて喘いだ。三年部員は

かり身で羊飼のヤマトつりこぎに、落伍者はあつた。水、液
 汚の色水混つた。

6月22日 芦屋ロックガーデン

10月4日 仁川岩場、佐藤、三宅

10月19日 榑素峠―棚越―逆瀬川、玉井、錦田、西垣、黒木

11月16日 榑素峠―座頭谷―宮家、田村、大島、玉井、玄瀬

佐藤、黒田、三宅、保母、佐藤(三)、北嶺、五百蔵

錦田、白井、etc

11月23日 芦屋ロックガーデン 兼前以下

11月24・30日 榑素峠、田村、玉井、錦田、大工原、保母

12月14日 宮家―六甲頂上―布引、山本、玄瀬、大島

田井、佐藤、保母、村井、西垣、錦田、長谷川

3月2日 仁川岩場、野田、五百蔵、錦田、白井、

共同装備在庫品 1959.6 現在

使用可能なものだけを収す。

テント

積善期用	ビニロン1号(4人用)	
	" 2号(5人用)	
	" 3号(5人用)	
	ナイロン1号(3人用)	
	" 2号(4人用)	
計	5張	21人分
夏用	12人用	1
	6人用	2
	5人用	2
計	5張	34人分
	ブランドミーツ	6枚
	ツェルト(ナイロン)	2

炊事具

バーナー	3台(1台使用) (他に故障2台)
石油コンロ	1台 (1.8ℓ容量)

コップ	5組
ナベ	大 3ヶ
"	小 2ヶ
タカン	大 2ヶ
ガイル 麻	11mm 300m (8本)
テリレン	11mm 40m

三脚道具

カラビナ	20
ハーケン	10
アイスハーケン	4
ハンマー	7
アブミ(2段)	2

その他

エア・マットレス	5
ノコギリ	4
スコップ	2
ナタ	4

(細かいものは省略)

1958年度 会計報告

収入の部

前年度繰越金	276
部費	41,450
合宿費残高	13,349
体育会より	11,000
雑収	435
テント料金	45,000
	<hr/>
	111,510

残高 ￥ 5,351

支出の部

通信費	3,420
合宿時費用	19,599
消耗品費 (燃料・トイレ・加圧)	10,230
修繕費	23,000
交際費	2,410
テント購入	39,000
ラジオス	3,800
エアマツク	2,000
雑費	2,700
	<hr/>
	106,359

(平田)

106,359

寄付金決算報告

ビニロン2号・3号テント製作

五八年末、年木山費多端の折に於ては、先般諸兄から多大の御援助をいただき、まことにありがたうございました。おかげで冬山、春山の計画を成功にみちびくことかできました。明細並にテント製作報告はその通りです。

収入合計	45,000
(450)	
テント2張	
製作費	39,000
	<hr/>
残高	6,000
現金	
バーナー(ラジオス)、エア	
マツク等の購入にあてさせて	
いただきました。	

製作報告

大要は「時報」の巻に詳載されビニロン2号と同じで、ビニロンは標高をけしきすに用いた。

3号は型、外吊り式でフレームが入っている。この奥は1号と同じ。相違点は、高さ150cm(6cm隙)

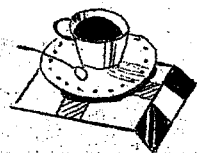
底面(85cm X 22.5cm 55cm X 20cm)と若干大さくなっている。

1号は4人用だが、3号は5人用として使用できる。

テレビを見ながら ジュースボックスで

お好きな音楽を聞きながら

安価で美味しい



洋・和食
喫茶

阪大食堂

へどうぞ

阪大医学部記念館一階

編集後記

さきよかたから、二二に第十号をおくる。不備な点を記する
とともに、御礼正を待つて後日に資したい。多くの人たちの精
しまれぬ協力、助言、ことに広瀬光華、米林、玉井両君に感謝
して記す。友松赤沢岳猫の記録へアタックのなかで
広瀬OB、サポート 田村、玉井、笠松、田井）は遅延をかさね
次号にせざるを得なくなつたのは残念である。(佐藤)

大阪大学山岳会「時報」第10号

一九五九年八月発行

発行所 大阪市北区新安町

大阪大学学生課内

大阪大学 山岳会

編集人 佐藤 俊

印刷所 大阪市西区江戸堀通二 豊博西

美研社

電話 445008番

會員名簿

一九五九年七月現在

會長		〔医学部〕	
藤田 肇 治	豊中市麻田九七	和田 豊 津	大阪市北区朝森町五二(35一四一三)
小 沢 基 次	阿倍野区王子町 南校職員家	水野 祥 太郎	神戸市東灘区御影町御家御影住宅三〇三号
西 里 勇 吉	大阪府茨木市仲之町	小 林 義 郎	大阪市西淀川区野里町一二九五(淀川三〇六)
坂 谷 信 次	姫路市の形町	河 原 信 二	神戸市東灘区住吉町垣内三二四(御影三二〇六)
新 谷 五 郎	豊中市救塚元町一丁目一四八(豊中三〇七)	小 沢 淳 二	泉佐野市天神山下五層敷(泉佐野八六五)
酒 井 英 之	大阪府南区千年町一四(75八五七一)	滝 井 一 郎	西宮市今津水波町一七一
恩 知 裕	大阪市天王寺区烏ヶ江	友 田 洋 一	泉佐野市益松町南産診療所
大 久 保 克 己			

阪大工学部精密工学科教授

阪大医学部名誉教授

阪大医学部第二解剖教授

市立大医学部整形外科教授

崩業

神戸赤十字病院院長

崩業

崩業

泉佐野病院院長

日本生命本社医務室(23二)

阪大病院婦人科

奈良医大整形外科

遍信病院

帝國産業KK厚生病院泉佐野診療所

伊藤俊夫	渡辺修治	吉川定範	小川彌栄	徳永篤司	松久博	家田千尋	住吉仙也	尾藤昭二	東沢達夫	小沢達夫	岩永剛	坪井圭之助	林伸一	穴戸元一	片山徹	〔理学部〕	水野健次郎	山口省太郎
23	25	25	25	26	26	28	29	30	30	30	30	31	31	32	32		11	13
尾崎市塚口竹町二丁目	大阪府箕面市箕面町平尾七三。	布施市長田	西宮市甲子園四番町四四	神戸市東灘区本山町福本梅林住宅14	枚岡市額田五八八	伊丹市伊丹常盤町三五七(伊丹二。二二)	西宮市羽衣町九七(西宮三一六)	大阪府泉北郡信太村聖ヶ岡	大阪市阿倍野区阪南町中六丁目一六	西宮市甲子園九番町七ノ二甲子園南住宅四。五	宝塚市吹庫山六四	豊中市熊野田旭ヶ丘公園住宅22号の508	刀根山病院外科	神戸市灘区珠後町一ノ二	西宮市松箱庄二五	吳市青山町一ノ一。	芦屋市三条町六三	東京部北多摩郡田無町東大原子核研究所
大手前病院産婦人科医長	阪大第二外科	阪大第二外科	国立療養所刀根山病院	芦屋市民病院外科医長	阪大第一内科	伊丹市民病院	神戸医大解剖学教室	阪大第一外科	阪大第二外科	阪大第二外科	紀南病院外科	国立呉病院	美津瀬副社長	東大原子核研究所				

山	川		高	岡	山	大	塚	細	加	大	棚	邊	高	龜	赤	新	岡	南	
山	川		木	本	本	村	谷	貝	藤	島	山	野	倉	野	松	保	府	東	
口	戸		俊	靖	進	一	一	一	幹	樺	俊	喜	達	良	二	正	雄	三	
次	俊		夫	治	一	生	弘	仁	太	夫	樹	久	准	之	郎	樹	三	三	
郎	治																		

〔工學部〕

醫學部	機	物	物	物	物	住	住	住	住	住	住	住	住	住	住	住	住	住	住
7/15	5	31	31	29	28	28	27	24	23	23	21	20	16	15	15	13	13	13	13

芦屋市月形町七三
 三茶南町九三
 西宮市松蔭五九
 仁川町一ノ七七
 神戸市東灘区住吉新堂四五（添米中）
 東京都三鷹市大沢 東京天文台官舎
 神戸市東灘区住吉新堂一四三（御影一二八九）
 尼崎市潮江住宅四〇・一
 大阪市住吉区刈田町九
 箕面市桜井六六九（桜井二五八）
 豊中市旭ヶ丘二・二七公園住宅ヲ号館一。六号
 大阪市西成区玉出本通一ノ一。
 豊中市力根山三丁目七。（豊中三〇九。）
 福岡県若松市小石上小原 日立若葉寮
 堺市上芝町四丁目五三八
 豊中市本所三丁目三八（豊中三一七八）
 （海外出張中）

阪大理学部物理仁田研助教
 大阪市大理工学部
 美津濃技術研究所
 慶応理工学院
 ヒッツパーブ大学徳島学教室
 東京天文台
 大阪ガス中央研究所
 住友化学大沢製作所
 阪大理学部附属アイントーブ研
 阪大歯学部二年在学中
 椿本千子製作所工作課
 日本電気KK
 日立金属KK
 阪大理学部大学院蛋白質研
 KK大阪ホイラー製作所
 阪大工学部電気科教授

仙波	武田	村上	高島	青藤	池田	吉原	吉見	河原	池宮	田村	黒川	坂上	遠藤	大沢	橋田	吉田	川村	五歩	
正	正	正	野	貞	滋	男	一	庵	二	造	一	大	忠	一	治	三	宏	一	郎

船7	機85	9.5	化9.6	治9	治10	機11	機11	機12	機12	機12	機13	機13	機13	機13	機13	機14	機15	機15	機15
----	-----	-----	------	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

岐阜市加納朝日町三十四
 京都市伏見区深草飯倉町附町管住宅二一六
 京市北浜倉町東一丁二五(塚九。四)
 姫路市彌干区新在家九四。
 尾崎市舊田園和一、三一
 山口県下松市 末光社管管宅十号
 京都府乙訓郡長瀬町附田下町(神定二六)
 東京都大田区大森
 西宮市高水谷沢町三三 西條社
 大阪府東淀川区三國町一三三(三國五四九)
 芦屋市大槻町三六(芦屋四三二六)
 大阪府阿倍野区山坂西之町三二
 東京都杉並区東田町二、一五。
 京都市左京区粟田口鳥居町四七(吉田三二一六)
 豊中市内田二五。(豊中五六三)
 西宮市鳴尾町平田四八

仙波能率事務所
 東海機工KK
 明光機製作所代表
 大七儿綱工場
 大阪鍛造KK
 日立製作所鑄造部
 日本郵船大阪支店工務課長
 川崎自動車KK大森製作所
 新研和工業KK
 田村香料KK
 福井精錬KK
 新研和産業KK
 関西電力石叡山支店工務部
 航空庁調査課
 日本純良藥品KK
 荒川林産化学工業KK
 汎建製作所
 京阪神急行車體部技術課長

西	堀	清	美
盛	岡	英治郎	
池	田	泰雄	
野	崎	善藏	
砂	越	竹夫	
奥	村	正己	
佐	野	利正	
大	崎	直義	
乾		品弘	
宗	極	与寿郎	
松	本	裕太郎	
斎	木	静男	
前		三太郎	
村	田	良二郎	
田	中	行雄	
久	保	三郎	
四	宮	誠裕	
村	瀬	泰弘	
樋	下	重彦	

通 33
 化 33
 船 28
 機 27
 精 21
 香 20
 精 19
 化 18
 " 17
 " 17
 船 16
 電 16
 " 16
 化 " 16
 " 16
 治 16
 機 16
 電 15

川崎市堀川町東芝社
 札幌市労働基準監督所
 東京都大田区東鉄大井工場
 東京都東区平井
 千代田区丸の内 永楽ビル内
 兵庫県加古川市溝之口一三二ノ三七五
 大阪市阿倍野区晴明通一七九(天下茶屋五七七六)
 東京都中央区西銀座四丁目
 市橋市長三丁目二二
 大阪府羽曳野市益田三〇ノ一三
 千葉県市川市、幡町四丁目三。四
 神戸市東田区丞井町六、七三三三
 大阪府寝屋川市宇香里 工廠並
 大阪市南北橋谷町一九(南七九。)
 阿倍野区相生通三丁目一五(云々屋三九五六)
 松山市北吉田 帝人松山工場

東之林機務技術課
 労働基準監督所
 回鉄監理局機械課長
 大同製鋼平井工場
 興亜石油KK製油課長
 神戸工業大久保工場
 大阪中央放送局放送所
 片倉工業KK
 乾黄金屬商
 阪大工学部応化助教
 阪大工学部応化助手
 防衛庁空襲第三課
 川崎製鉄計量器工場
 大阪市大連工学部機械
 住友金屬KK
 帝國人絹
 富士通機械

川島 勇	機 29	北海道空知郡成平町住友平和台住宅	住友石炭 KK
宮本 貞雄	通 29	尾崎市武庫之莊四丁目三〇。	早川電気 KK
近 藤 三	機 29	東京練馬区練ヶ丘二二三九七	川崎飛行機廠量製作所
二 木 節夫	通 29	岐阜県稲葉郡加野西野町正立ち小方	日立造船機身工場
空 中 勝	船 31	豊中市枚塚本通一ノ二 日立造船豊中寮	
鷲 沢 忍	機 31	横浜市鶴見区東寺尾町第八芙蓉寮	
立 花 直治	機 31	神戸市生田区中山手通七ノ八	阪急電鉄
鳴 海 淑雄	治 31	芦屋市打出翠ヶ丘町之三	
西 川 元夫	電 32	大阪市東淀川区下新庄町二ノ五四	近畿日本鉄道 KK
芦 井 祥夫	化 32	吹田市南泉町二六三五	
椎 木 三郎	精 32	岐阜県稲葉郡織沼所川崎区 柴田方	
【経済学部】			
田 島 汎	昭 28	東京都世田谷区深沢町四ノ六九 住友金属多摩川寮	住友金属 KK
土 屋 直	29	和歌山市湊一八五。	住友金属 KK 和歌山製作所
木 村 裕一	31	大阪市城東区放出町三五六	日本アルミ
辻 川 眞	32		
【法学部】			
山 本 光二	29	名古屋市市中区押勢山町一三七 大和銀行名古屋寮	大和銀行
玄 橋 茂	30	西宮市末広町五	西宮市役所

岡田博司 【薬学部】	枝 忠 男 三 枝 礼 子 井 上 一 枝 坪 井 和 子 (森川)	石 沢 命 久 【文学部】	甘 比 沃 延 也 横 井 保 枝 (金木)	一 山 幸 代
33	29	30	30	31
東京都世田谷区深沢町三二六 住友信託銀行寮	大阪市旭区大宮西之町一丁目四一 東京葛志区赤坂橋吉町一ノ四九 神戸市東灘区御影町一里塚一〇九三 豊中市熊野田旭ヶ丘公園住宅22号の508	大阪市北区第安町三二 阪大歯学部矯正科内	西宮市甲子園口三保町 布施市長栄寺一ノ四。 鈴木方	豊中市下寺内一九一八
住友信託銀行	田辺製菓 日本製材	阪大薬学部	阪大歯学部矯正科	豊中一中教壇

現 役		現 役	
野田 惠一郎	大阪府東淀川区高石町羽衣三入	經濟学部 四年	
兼清 喜雄	大阪府東淀川区高石町羽衣三入	工学部 四年(精密)	
山本 信樹	大阪府東淀川区高石町羽衣三入	工学部 四年(機械)	
米林 外茂男	大阪府東淀川区高石町羽衣三入	工学部 四年(志化)	
平野 忠彰	奈良県吉野郡上市町 櫻屋川市香里越上塚	經濟学部 四年	
由緒 剛雨	大阪府東淀川区高石町南五三二一七	工学部 四年(精密)	
木村 征二	堺市野尻町四之五	工学部 四年(機械)	
大島 浩	神戸市東灘区御影町石屋三六〇一三	工学部 三年(通信)	
笠井 康雄	尼崎市西大島船米莊二ノ五〇	工学部 三年(志化)	
佐藤 卓彌	西宮市伏原町九ノ三三〇六号	理学部 三年(化学)	
田村 俊秀	甲子園口二丁目三四七(西宮)④三四六	医学部 専攻課程 一年	
田井 英男	尼崎市東富松寺車塚三三二	文学部 三年(仏文)	
森村 弘子	大阪市北区曾根崎上二ノ二六	医学部 専攻課程 一年	
村井 志雄	東京都世田谷区深江二ノ六	工学部 三年(冶金)	
宏瀬 貞雄	豊島区北長二ノ一六九二	医学部 専攻課程 一年	
	大阪市東淀川区三國本町三一	工学部 三年(電氣)	
	〃 北区中崎町四八	工学部 三年(寒梅)	

大工原	高橋雄	酒井次郎	前沢祐一	黒木隆憲	金子忠男	西垣圭二	坊出英樹	五百藤弘典	萩井武彦	佐藤能保毅	丸尾義尚	長谷川幸夫	森田吉昭	中村吉昭	錦田晃一	宇野雅明
-----	-----	------	------	------	------	------	------	-------	------	-------	------	-------	------	------	------	------

尼崎市北町公町三ノ一、一、二	大阪市東成区片町三ノ三五	伊丹市湊町三。三	大阪市西成区旭北通一丁目	神戸市灘区弓ノ木町五ノ四	池田市才田町五二四、一	大阪市東住吉区西今川町五ノ二七	阪大鴻池寮	豊中市桜塚東通七ノ二二	大阪市阿倍野区相生通一ノ五六	空塚市伊子志院摩山	伊丹市若菱町三丁目三九	阪大枚方寮	大阪市北区天神橋筋三丁目六八	堺市出島通三丁目一六八	京都市東山区六原竹村町三五。	豊中市螢ガ池西町三ノ九 岸本方	岸和田市所山町四一三
----------------	--------------	----------	--------------	--------------	-------------	-----------------	-------	-------------	----------------	-----------	-------------	-------	----------------	-------------	----------------	-----------------	------------

歯学部専門課程一年	工学部二年(精研)	工学部二年(冶金)	工学部二年(電子)	工学部二年(燃焼)	工学部二年(精密)	工学部二年(精研)	工学部二年(精研)	工学部二年(精研)	工学部二年(精研)	工学部二年(通信)	工学部三年(機械)	医学部二年	医学部四年	理学部三年	理学部三年(化学)	医学部二年
-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-----------	-------	-------	-------	-----------	-------

白	櫻	加	三	松	北	米	小	横	瓶
井	本	藤	澤	井	川	沢	山	田	井
達	考	明	白	袂	袂	成	元	隆	善
郎	治	成	山	三	三	二	靖	文	一
			夫	條					郎

神戸市灘区藤原北町二丁目五〇ノ一	尾崎市西宮松武庫之荘一ノ一五	大阪市天王寺区空堀通三ノ二三	阪大瀧池寮	大阪府東成区大今里本町三ノ二一	京都市伏見区山崎町三六二	大阪府池田市尊鉢八丸	大阪府浪速区元町一ノ七五八	豊中市若菜通二ノ二	西宮市米甲子園
------------------	----------------	----------------	-------	-----------------	--------------	------------	---------------	-----------	---------

工学部	工学部	工学部	工学部	工学部	工学部	工学部	工学部	工学部	工学部
二年	一年	一年	一年	一年	一年	一年	一年	一年	二年
(機械)	(造船)	(造船)	(造船)	(造船)	(造船)	(造船)	(造船)	(造船)	(造船)

Coffee
Tea

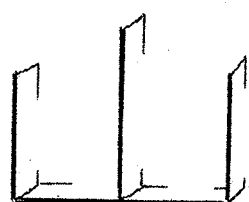
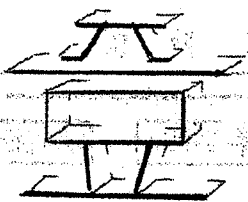
コ-ヒ-茶

憩のひととき

阪大 理学部前

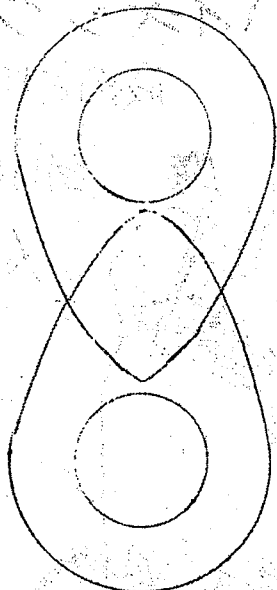
ABC

喫茶店



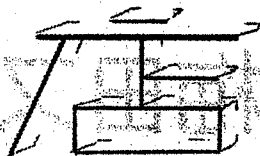
登山用品専門店

登山用品なら
定評のある当店へ
ぜひ！を



登山用具
ハイクン・カブチ
ガイド

登山用品なら 何でも揃る



大阪市北区曽根崎上一ノ二四
T E E (34) 4 1 9 2

大阪駅

第一生命ビル

阪神百貨店

梅田スポーツ商会

梅田ビル

登山

ハイキング用具は
最新式用具

信用ある

メーカー品を!

梅田スポーツ商会

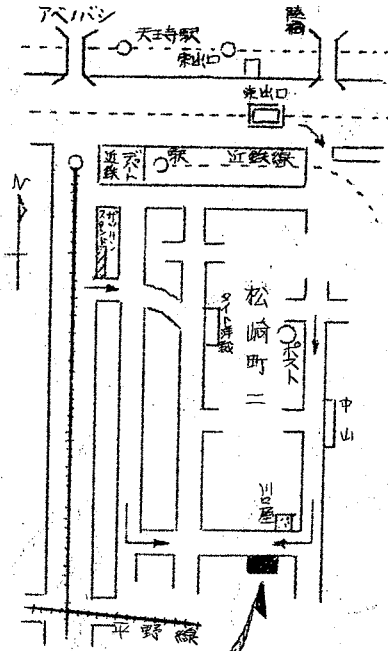
大阪市北区梅田3番地〔電☎ 5706 7421 ⑤5013〕

大阪駅前第一生命ビル南側西角

大正九年より伝統のある

吉田屋の

山
スキ
靴靴



吉田屋株式会社

大阪市阿倍野区松崎町三丁目三八番地

電話 天正寺 (77) 九五四一 番

○各大学山岳部の
御用を承っております。

パン
食で
いつも
健康



パンの王様



神戸屋パン

本社工場 大阪・福島・西通 ㊟7191 代表
西淀工場 大阪・西淀川・御幣島 ㊟0712

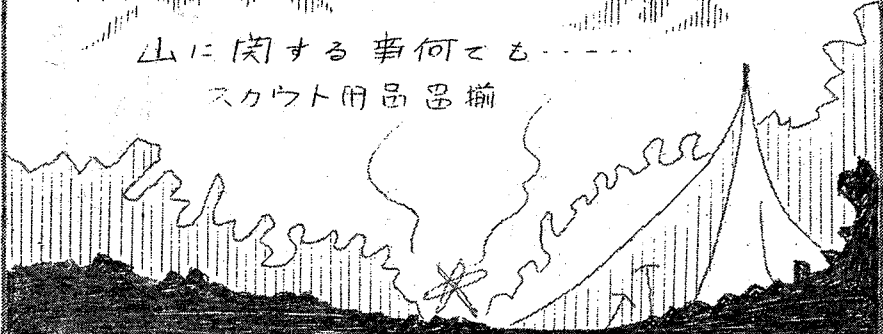
キャンプ用品 山岳用品

格安販売

全国各地発送

山に関する事何でも.....

スクウト用品 留揃



山とキャンプとスキー

株式会社

北口山スキー研究所

本店・大阪市北区綱笠町10〜1 電(34)3240

九州店・福岡市蓮池町善道ビル11 電(2)6097

美津濃

完全な装備で 楽しい登山

夏山用品

オーストリア製
ビッケル・アイゼン・ハーケン
カラビナムガー・クリンガー

スイス製
ビッケル・トリコニー

スウェーデン製
プリムスコンド

国産品も豊富取揃



本店：大阪淀屋橋・東京支店：神田小川町

60 ニューモデル 製作中

(PAT. No. 482499)



ヒッコリーパック ラミ・スキー

両面ヒッコリースキーの大革命！
最高材料ヒッコリー材を使用
した 世界最高級品です。

